

富地原岩野 A

— 福岡県宗像市大字富地原所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第49集

2001

宗像市教育委員会

FUJIWARAIWANO
富地原岩野A

— 福岡県宗像市大字富地原所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第49集



2001

宗像市教育委員会

序 文

宗像市は福岡県北部の福岡市、北九州市の中間に位置し、周囲を山塊に囲まれた市域面積76.82平方キロメートルの内陸盆地状の地理的景観をみせています。

宗像地域における人々のくらしは、いまから約1万5千年前まで遡ることができます。弥生時代から古墳時代には、大陸・朝鮮半島との交易の窓口として、古代から中世には、宗像大宮司家が勢力を張り、活発な海洋活動の結果として貴重な文化財をこの地にもたらしました。近世には、福岡藩の主要な卵生産地として、近代には、多くの教員を輩出した土地柄として「宗像卵宗像教員」といわれてきました。昭和36年の国鉄鹿児島本線の電化は、福岡市、北九州市への通勤圏として注目され、昭和38年に着工の自由ヶ丘団地、41年着工の日の里団地造成などがあり、人口の急増、都市化が進められてきました。今日では、「快適生活都市・学術文化都市・高福祉都市」をめざしたさらなる発展を続けています。

しかし、このような発展は、各種の開発をとめない、わたしたちのくらしに利便性をもたらす反面、今日的課題である自然・歴史・生活環境の大幅な変更をもたらし、地球的規模での生活様式の方角転換が迫られています。

埋蔵文化財保護行政をとりまく環境も、初期には、開発優先施策の中で、多くの遺跡が未調査のまま消滅し、記録保存と称した部分調査が行われてきました。

最近では、埋蔵文化財は生活環境の一部との認識が少しずつ浸透しはじめ、開発に先だって、重要なものについては保存整備を図り、歴史的文化遺産を後世に伝えようとする努力も進められています。

本報告書は、平成3年度に実施した古代の集落跡の発掘調査記録です。古代掘立柱建物跡をはじめ貴重な文化財が出土しました。

本書が、広く文化財保護行政及び学術研究に貢献することを願いますとともに、発掘調査全般にわたってご協力いただきました数多くの方々に、心からの感謝の意を表する次第です。

平成13年3月30日

宗像市教育委員会

教育長 川 崎 雅 光

例 言

1. 本書は、富地原地区県営ほ場整備事業に伴い、平成3年度に緊急発掘調査を実施した富地原岩野A遺跡の報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 富地原岩野A遺跡は福岡県文化財番号330533である。
4. 本遺跡の測量は、国土調査法第Ⅱ座標系を用いた。
5. 遺構の名称は種類ごとに記号化した。
(SA：柵列状遺構 SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構)
6. 本書に掲載した平板測量図及び遺構実測図は、安部裕久、白木英敏が作成した。
7. 本書に示した遺構実測図の方位は磁北である。
8. 本書に掲載した遺物実測図は、安部、岡 崇、多比良佳奈子が作成した。
9. 本書に掲載した図面の製図は、多比良、中原美知子が行った。
10. 本書に掲載した遺跡・調査区、遺構及び遺物の写真撮影は安部が行った。
11. 本書の執筆及び編集は安部が行った。
12. 本調査において出土した遺物および実測図、写真等の資料は宗像市教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序 説

- | | |
|-------------|-------|
| 1. 調査にいたる経過 | 1 ページ |
| 2. 調査の組織 | 3 ページ |
| 3. 位置と環境 | 4 ページ |

第Ⅱ章 調査の記録

1. 調査の概要	7ページ
2. 掘立柱建物	7ページ
3. 溝状遺構	12ページ
4. その他の遺構	24ページ
5. 遺構及び出土遺物の計測	24ページ

第Ⅲ章 ま と め

1. 調査の成果	27ページ
2. 1期の遺構とその年代について	27ページ
3. 2期の遺構とその年代について	28ページ
4. 3期の遺構とその年代について	30ページ

挿図目次

第1図 富地原岩野A遺跡調査区及び事業予定図 (1/2,000)	2ページ
第2図 富地原岩野A遺跡及び周辺遺跡分布地図 (1/25,000)	5ページ
第3図 富地原岩野A遺跡遺構配置図 (1/100)	8ページ
第4図 SB1掘立柱建物跡遺構実測図 (1/60)	9ページ
第5図 SB2掘立柱建物跡遺構実測図 (1/60)	11ページ
第6図 SD1溝状遺構遺物出土状況図 (1/60)	12ページ
第7図 SD1溝状遺構出土遺物実測図Ⅰ (1/3)	14ページ
第8図 SD1溝状遺構出土遺物実測図Ⅱ (1/6)	16ページ
第9図 SD1溝状遺構出土遺物実測図Ⅲ (1/3)	18ページ
第10図 SD2溝状遺構出土遺物実測図Ⅰ (1/3)	21ページ
第11図 SD2溝状遺構出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	23ページ

表 目 次

表 1	富地原岩野A遺跡	発掘調査組織体制一覧	3 ページ
表 2	富地原岩野A遺跡	掘立柱建物跡 計測表	24 ページ
表 3	富地原岩野A遺跡	溝状遺構 計測表	25 ページ
表 4	富地原岩野A遺跡	柵列状遺構 計測表	25 ページ
表 5	富地原岩野A遺跡	出土遺物 計測表 1	25 ページ
表 6	富地原岩野A遺跡	出土遺物 計測表 2	26 ページ

図版目次

図版 1	上	富地原岩野A遺跡	周辺の航空写真
図版 1	下	富地原岩野A遺跡	全景写真（北から）
図版 2	上	富地原岩野A遺跡	SB 1 掘立柱建物跡（南から）
図版 2	下	富地原岩野A遺跡	SB 2 掘立柱建物跡（西から）
図版 3	上	富地原岩野A遺跡	SD 1 溝状遺構遺物出土状況写真（西から）
図版 3	下	富地原岩野A遺跡	SD 1 溝状遺構土層断面写真（西から）
図版 4		富地原岩野A遺跡	出土遺物写真 I
図版 5		富地原岩野A遺跡	出土遺物写真 II
図版 6		富地原岩野A遺跡	出土遺物写真 III

第I章 序 説

1. 調査にいたる経過

宗像市は福岡県北部の福岡市、北九州市の中間に位置し、周囲を山塊に囲まれた市域面積76.82平方キロメートルの内陸盆地状の地形を呈している。市域中央の平坦面は、釣川流域の沖積低地で、おもに水田を中心とする農業用地として利用されており、この平坦面周辺の低丘陵に住宅地などが展開している。機械製造などの工場がほとんど立地しておらず、大都市近郊の都市としては、豊かな自然が多く残っており、近年開発された住宅地の周辺にのどかな田園風景が広がっている。

宗像市の生活は、明治期から戦前までは、人口が、概ね1万5千人ほどで推移しており、戦後の40年代頃に住宅都市として発展をはじめると、ほとんど変化をみない。この頃の産業は、昭和30年に行われた国勢調査によると、農業就業者比率が、全国で37.9%であるのに対して、宗像市は58.6%と就業者の過半を占めるなど農村的性格の強い典型的な農村地域であったものといえる。ところが、昭和40年代頃から住宅都市として発展をはじめると宗像市は、昭和35年当時に2千戸ほどあった農家が、昭和55年には1千4百戸ほど、平成2年には1千戸と、著しい減少化傾向をみせる。このような農業離れ傾向のなか、団地造成などで肥沃な農地が日増しに都市化・住宅地化してゆく現実に危機感を募らせた宗像市は、県の「農業振興地域」指定(昭和47年)を受け、水田の基礎整備と共同利用組織による中大型機械体系による米を基幹作物とした自立農家の育成と経営の安定を図るための「農業基盤整備計画」を策定し、都市近郊型の「生活環境型農業」へと転換を図っている。このような動きのなかで、宗像市域での県営ほ場整備事業が展開している。

富地原地区では、平成2年度から農業基盤整備事業の1つである富地原地区県営ほ場整備事業がはじめられており、今回の調査は、その2ヶ年目事業に伴う、緊急発掘調査事業である。

発掘調査は、事業規模が大型であるために確認された遺跡の現状保存は困難を極めており、盛土調整などの可能な限りの保存対策を講じてきたが、どうしても調整がつかず消滅が必至の区域については、記録保存とという形で対処した。富地原岩野A遺跡も、このような経緯によって調査にいたった遺跡である。



第1図 富地原岩野A遺跡調査区及び事業予定図(1/2,000)

遺跡の現状は、丘陵斜面の開墾によって水田化しており、棚田を形成している。この段階での踏査では、遺構確認はできなかったが、当丘陵の尾根部や西斜面、枝丘陵には、富地原小峯遺跡や富地原梅木遺跡をはじめとする名残遺跡群の各遺跡が分布しており、当丘陵における遺構の存在は、十分に考えることができた。よって、平成3年度富地原地区県営ほ場整備事業(第1図)に伴い、文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知3福農整第48-6号が福岡県福岡農林事務所長から提出され、切り盛り調整がつかずに削平されることとなった当丘陵について試掘調査をおこない、遺構の確認された500m²について調査区域を設定。緊急発掘調査を実施し、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構5条、柵列状遺構1本、小竪穴などの各遺構を検出した。この結果、当遺跡が集落遺跡であることが判明し、釣川が形成する宗像平野南東部域における富地原・名残・徳重・吉武地区での資料を1件加えることとなった。

発掘調査期間は、平成3年11月1日に試掘坑を設定したところからはじまり、11月29日に座標点測量を行い現地での発掘調査日程を終了した。

2. 調査の組織

富地原岩野A遺跡は、平成3年度富地原地区県営ほ場整備事業に伴い、緊急発掘調査されたものである。発掘調査は、宗像市教育委員会が主体となって実施した。この発掘調査に係る組織体制は、平成3年度の現地野外調査に係るものと平成12年度の報告書刊行に係るものとの2体制に分かれる。現地野外調査・報告書刊行に係るものも、その組織体制は概ね変わることがなく、各々、その年度の宗像市教育委員会の組織体制に組み込まれた人員の名称と符合する。以下、表1にこれを取りまとめる。

表1 富地原岩野A遺跡 発掘調査組織体制一覧

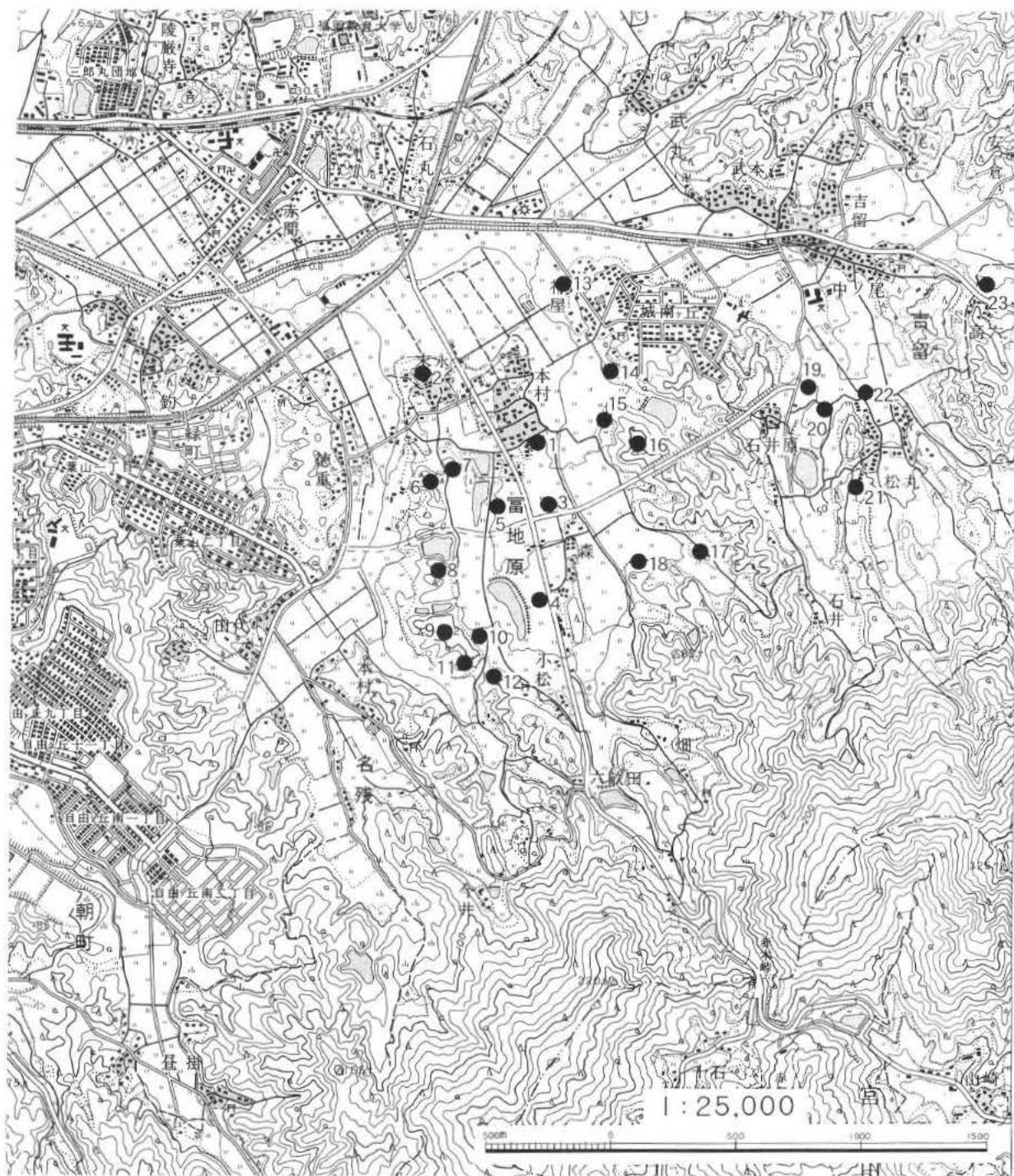
事業区分	発掘調査(平成3年度)		報告書刊行(平成12年度)	
調査主体	宗像市教育委員会		宗像市教育委員会	
総括	教育長	森下 照 清	教育長	川崎 雅 光
	教育部長	中山 宏 基	教育部長	桑野 俊 一 郎
	社会教育課長	吉田 繁 利	社会教育課長	伊豆丸 正 敏
	文化財係長	尾山 清	文化財係長	原 俊 一
庶務	主 査	北野 隆 文	主 査	安部 裕 久
担 当	技 師	安部 裕 久	主 査	安部 裕 久

3. 位置と環境

宗像市は、福岡県北部に位置しており、九州最大の都市である福岡市を西方に、九州の門戸とされる北九州市を東方にほぼ等距離に配する中間点にあたる。当市は、北部に湯川山・孔大寺山・金山・城山と続く四塚連山、南部に磯辺山・許斐山と続く宗像・鞍手低山地を配し、周囲を低い山地や山塊に囲まれ盆地状地形を呈している。その中央低地を東から西に貫流する釣川が走り、玄界灘へとそそぐ。市域は東西13.2km、南北9.7kmと地形的なまとまりをもち、76.82km²の面積をもつ。

富地原岩野A遺跡(第2図1)は、福岡県宗像市大字富地原(字岩野)1479番地周辺に所在する。当遺跡は、宗像市の南東部地域で、鞍手郡宮田町との郡境にそびえる磯辺山・許斐山から続く宗像・鞍手低山地の一山、標高326.7mの新立山と標高296.9mの麿山の両山から宗像市のほぼ中央を西流している釣川が形成する沖積低地に向かって派生する八手状に開く舌状丘陵群の一枝丘陵東緩斜面裾部に広がりを見せる。当遺跡が分布するこの八手状の舌状丘陵群は、富地原・名残・徳重・武丸・吉留地区にまたがるもので、眼下には、釣川の形成する沖積低地を一望することができる。背後には、新立山と麿山を仰ぎみることができる。これら山塊から派生する各丘陵は、細長く伸び、谷間は、山塊を扇の要とする扇状地形を呈して、沖積低地に続く谷水田を形成している。弥生時代前期以降、このような谷水田は生活基盤を支える灌漑地として開発され、かなり奥まった地域においてもその生活の痕跡を見ることができ、当丘陵群においても数多くの遺跡が発見されている。

当遺跡が分布する枝丘陵には、当遺跡をはじめ、富地原森崎遺跡(第2図2)や富地原惣原遺跡(第2図4)など12遺跡が確認されている。これらの遺跡は、その立地によって大きく2つに大別される。その1は、花崗岩類のなかの北部九州主部花崗岩類に属する北崎トール岩^(註1)、所謂、梅乱土と呼ばれるものを主体とした地盤を有する地域で、土壙墓や木棺墓をはじめとした墳墓遺構をその中心とするもの。その2は、砂礫層^(註2)を主体とした地盤を有する地域で、竪穴式住居や土坑などの集落に伴う遺構をその中心とするものである。前者には、先端が二股となっている丘陵西半部があたり、後者には丘陵東半部にあたる。これらのうち西半部地域では、弥生時代中期後葉を中心とした木棺墓・土壙墓群からなる富地原梅木遺跡(第2図6)、弥生時代後期末葉から古墳時代初頭を中心とした石棺墓・土壙墓群からなる徳重高田遺跡(第2図8)、古墳時代前期後葉を中心とした土壙墓・割竹形木棺直葬墓からなる名残藤河内遺跡(第2図11)、古墳時代中期後葉を中心とした石棺系の小型



第2図 富地原岩野A遺跡及び周辺遺跡分布地図(1/25,000)

- | | | | | |
|--------------|---------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 富地原岩野A遺跡 | 2. 富地原森崎遺跡 | 3. 富地原森遺跡 | 4. 富地原惣原遺跡 | 5. 富地原岩野B遺跡 |
| 6. 富地原梅木遺跡 | 7. 富地原小峯遺跡 | 8. 徳重高田遺跡 | 9. 名残高田遺跡 | 10. 富地原大原遺跡 |
| 11. 名残藤河内遺跡 | 12. 名残長浦遺跡 | 13. 富地原神屋崎遺跡 | 14. 富地原深田遺跡 | 15. 富地原古賀遺跡 |
| 16. 富地原明天寺遺跡 | 17. 富地原上瀬ヶ浦遺跡 | 18. 富地原川原田遺跡 | 19. 武丸高田遺跡 | 20. 武丸小伏遺跡 |
| 21. 武丸町添遺跡 | 22. 吉留京田遺跡 | 23. 吉留下惣原遺跡 | | |

竪穴式石室からなる富地原大原遺跡(第2図10)などの墳墓群が丘陵尾根や緩斜面上に北から南へと分布している。古墳時代後期になると、これらの地点に横穴式石室が導入され、小グループ単位の墳墓地を点々と形成している。これら墳墓の構築には、安定した地盤を有することが一つの条件となるもので、当丘陵西半部にみられる花崗岩の風化土は、土木工事等においても、最も安定した地盤とされており、掘削等の加工も比較的容易にできる土壌であることから、墳墓構築には、好地点であったものと考えられる。また、東半部地域では、弥生時代中期後葉から弥生時代後期後半を中心とした住居跡からなる富地原岩野B遺跡(第2図5)、古墳時代中期を中心とした住居跡からなる富地原森崎遺跡・富地原森遺跡(第2図3)、古墳時代末から古代にかけての掘立柱建物跡からなる今回報告の富地原岩野A遺跡などの集落跡が緩斜面上に分布している。これら集落跡の構築には、安定した地盤と水利を有することが一つの条件となるもので、当丘陵東半部にみられる河成段丘中位段丘下位面構成層は、旧扇状地形の砂礫層であり、安定した地盤で水捌けのよい土壌であることから、当丘陵東半部は、集落の広がる好地点であったものと考えられる。

当丘陵にみる遺跡の分布を視野に入れて当丘陵の東丘陵に目を転ずれば、丘陵北西先端部に河成段丘中位段丘下位面構成層がわずかにみられるもののそのほとんどは、北崎トータル岩で構成されている。これらの地形に遺跡を重ねあわせてみると、当遺跡の分布する丘陵と同様の分布がみられる。富地原神屋崎遺跡(第2図13)や富地原明天寺遺跡(第2図16)がその好例である。前者は、丘陵北西先端部の河成段丘中位段丘上に分布する遺跡で、住居跡及び掘立柱建物跡、土坑などが検出され、滑石の白玉・有孔円盤及びその未製品などが出土し、集落内に家内手工業的な生産の痕跡を垣間見ることができる。後者は、土壙墓・木棺墓を中心とした墳墓遺跡であることが試掘調査等により確認されている。とくに丘陵頂部に建立されていた祇園社跡は、『筑前國續風土記拾遺』に「古賀に在小高き丸山松林の中也。寛政十二庚申年氏社拝殿を経営すとて、里民地を掘りて石櫃を得たり。中に骸骨存せり。又、櫃の四方より壺を出せり。其の一には甲冑鏡(径二寸許、銘文なし)を納む。余の三には各朱を充てり。さて、その種の物は占者の占いに何せて側なるなる春日石祠の下地に埋めしとぞ、誰人の葬地なるにや知りがたし。里民は藤原千歳丸の墳なるべし」との記述が見えるところの祇園社と想定されるもので、社殿跡の傍らには、文献に見える春日社の石祠も存在している。文献の内容から石櫃と標記されているものは、内面に赤色顔料を塗布した石棺墓を想起させるもので、出土遺物の組合せから推測して5世紀代前半のものと考えられ、この遺構の存在は、試掘調査の成果を補填するに足りる資料といえ、当丘陵が墳墓を中心とした立地であることを示している。

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の概要

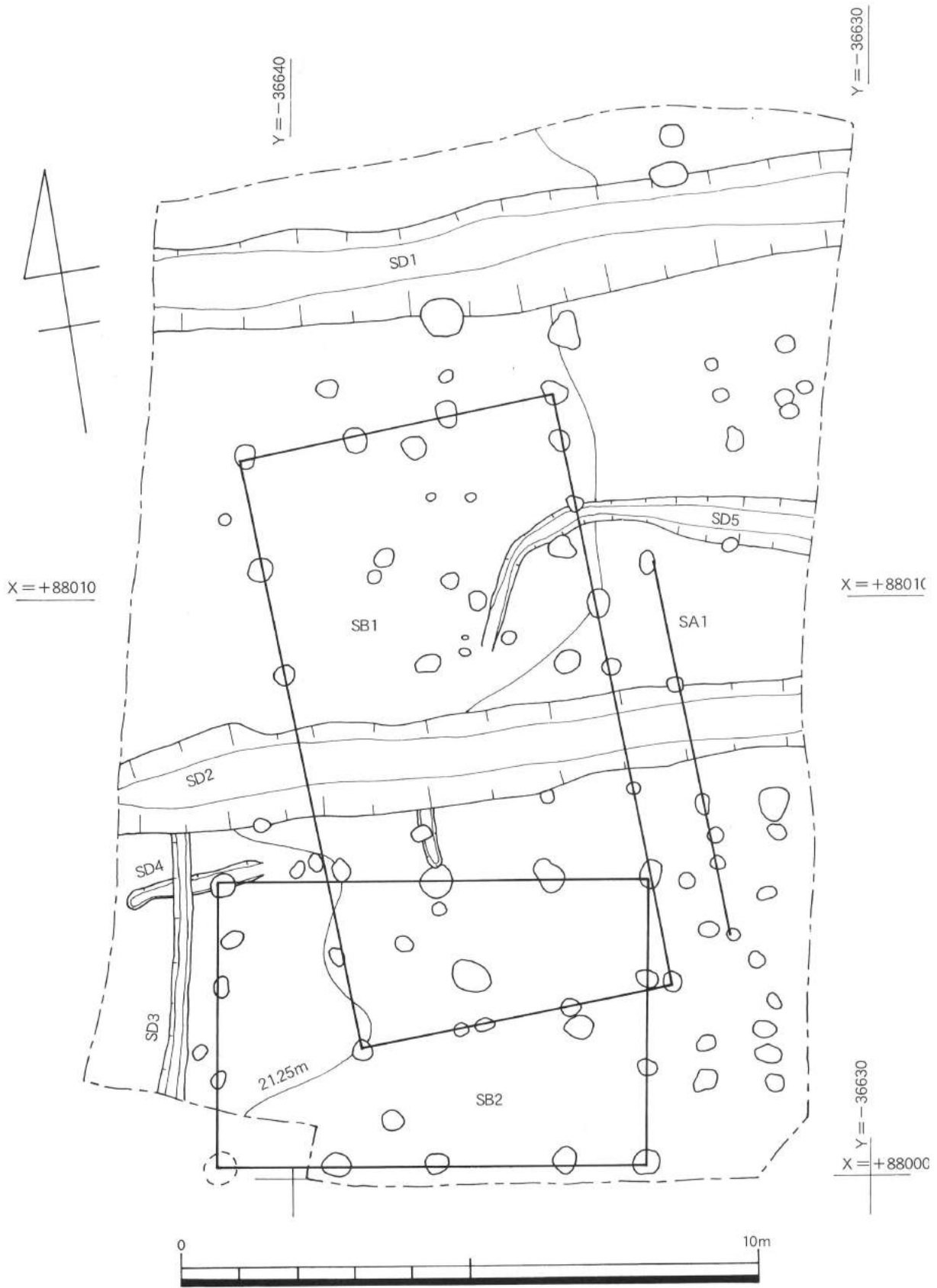
富地原岩野A遺跡は、新立山・靡山から北に派生する舌状丘陵東緩斜面裾部に広がる河成段丘中位段丘下位面構成層を地盤とし、調査区域(第3図1)を中心に南北200m、東西300mの範囲に遺構分布を示すものであるが、今回の調査は、このうち、県営ほ場整備事業で、切り盛り調整のできなかつた削平部分のたんぼ1枚(遺構面は、標高21.0mから21.5mに分布している。)で実施されたものであり、その他の地域については、盛土保存されることとなったため、遺跡の全容を知るものではなかつた。しかし、掘立柱建物跡とそれに伴うものと考えられる溝状遺構などを検出することができ、いくつかの重要な成果をあげることができた。とくに、SD1溝状遺構検出の土器群は、一括資料となるもので、宗像地域東南部における土器変遷上の一点を示す資料となり得るものとする。

以下、当遺跡検出の遺構(掘立柱建物跡2棟、溝状遺構5条、柵列状遺構1件、小竪穴)及び出土遺物について、その所見を記述することとする。

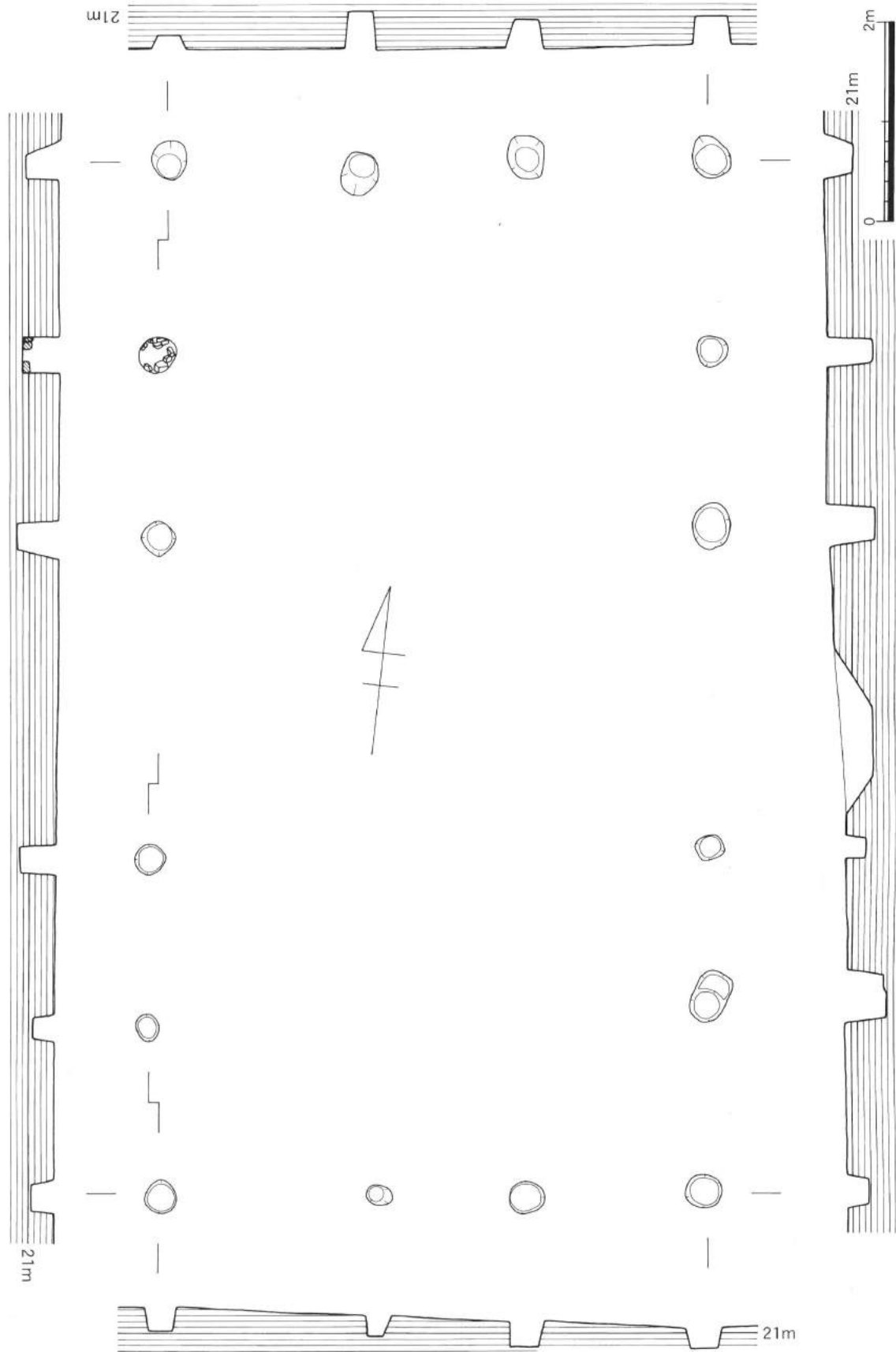
2. 掘立柱建物跡

(1) SB1掘立柱建物跡

遺構(第3図・第4図) 主軸をN-6°-Wにとるもので、短辺3間×長辺6間の長方形プランを呈する構築物である。調査区内中央を概ね南北に走る標高21.25mの等高線は、当遺構を斜行するように走り、東側長辺の北から3番目の柱穴から入り、西側長辺の北から5番目の柱穴に抜ける。遺構は、調査区域のほぼ中央に位置しており、地盤は、西から東へ僅かな傾斜をもつ。東側長辺の北から2番目の柱穴はSD5溝状遺構のコーナー部を切る。また、東西長辺はSD2溝状遺構によって切られており、両遺構との新古関係をあらわしている。ここでは、SD5溝状遺構が最も古いもので、続いて当遺構。最後にSD2溝状遺構となる。当遺構の計測結果は、北側短辺長で、5.45mを測り、その柱穴間は、西から東へ1.93m・1.67m・1.85mを測る。柱穴の深さは、30cm~50cmほどで、柱穴底の標高は、平均20.8mである。南側短辺長は、5.46mを測り、その柱穴間は、西から東へ2.16m・1.50



第3図 富地原岩野A遺跡遺構配置図(1/100)



第4図 SB1 掘立柱建物跡遺構実測図(1/60)

m・1.80mを測る。柱穴の深さは、20cmほどで、柱穴底の標高は、平均21.0mと北側短辺の柱穴底標高より20cmほど高い値を示している。東側長辺長は、10.39mを測る。北から4番目の柱穴をSD 2号溝状遺構に切られ、検出することができず、その柱穴間は、第3～4柱穴間及び第4～5柱穴間が想定のものになるが、ここでは第3～5柱間を測り、これを2分割することでその数値とした。よって、東側長辺柱穴間は、北から南へ1.93m・1.74m・(1.63m)・(1.62m)・1.61m・1.86mとなる。柱穴の深さは、20cm～50cmほどで、柱穴底の標高は、平均20.8mである。西側長辺長は、10.43mを測る。北から4番目にあたる柱穴をSD 2号溝状遺構に切られ、ここでは、検出することができず、その柱穴間は、第3～4柱間及び第4～5柱間が想定のものになるが、ここでは第3～5柱間を測り、これを2分割することでその数値とした。よって、西側長辺柱穴間は、北から南へ1.91m・1.83m・(1.64m)・(1.63m)・1.89m・1.73mとなる。柱穴の深さは、20cm～40cmほどのもので、柱穴底の標高は、平均21mと東側長辺の柱穴底標高より20cmほど高い値を示している。

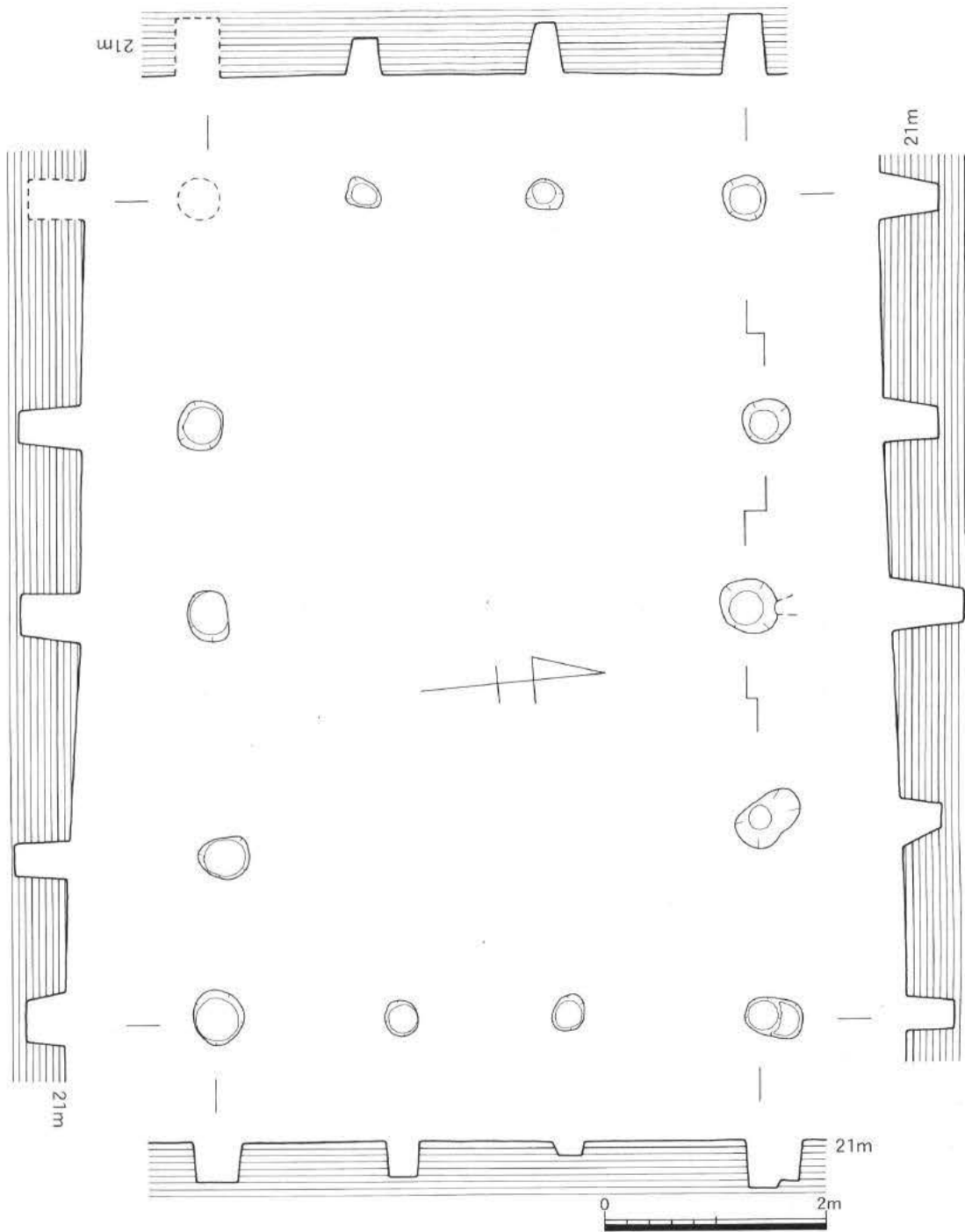
出土遺物 柱穴の柱根部腐蝕部分に堆積した土壌から少数の土師器の碎片を採取しているが、器形及び器種等を判断できる資料ではなく、図示することも困難なものであった。

(2) S B 2 掘立柱建物跡

遺構(第3図・第5図) 主軸をN-85°-Wにとる長方形プランを呈するもので、短辺3間×長辺4間の構築物である。調査区域内中央を概ね南北に走る標高21.25mの等高線は、掘立柱建物跡をW字状に、北側長辺の西から2番目の柱穴から入り、南側長辺の西から1番目の柱穴に抜ける。調査区域のほぼ南いっばいに位置しており、地盤は、西から東へ僅かな傾斜をもつ。西側短辺の北から1番目の柱穴がSD 4溝状遺構を切る。また、北側長辺の西から5番目柱穴は、S B 1掘立柱建物跡東側北から6番目柱穴を切っており、両遺構との新古関係をあらわしている。ここでは、SD 4溝状遺構及びS B 1掘立柱建物跡が古く、続いて当遺構となる。SD 4溝状遺構とS B 1掘立柱建物跡との関係については確認できなかった。当遺構の計測結果は、西側短辺長は、4.95mを測り、その柱穴間は、北から南へ1.82m・1.63m・1.50mを測る。柱穴の深さは、30cm～50cmほどで、柱穴底の標高は、平均20.8mである。東側短辺長は、4.95mを測り、その柱穴間は、北から南へ1.77m・1.49m・1.69mを測る。柱穴の深さは、10cm～40cmほどで、柱穴底の標高は、平均20.8mと西側短辺の柱穴底標高と同じ値を示している。北側の長辺長は、7.40mを測り、その柱穴間は、西から東へ2.06m・1.63m・1.91m・1.80mを測る。柱穴の深さは、30cm～60cmほどで、柱

穴底の標高は、平均20.7mである。南側の長辺長は、7.46mを測り、その柱穴間は、西から東へ2.06m・1.71m・2.21m・1.48mを測る。柱穴の深さは、50cm～60cmほどで、柱穴底の標高は、平均20.7mと北側長辺の柱穴底標高と同じ値を示している。

出土遺物 柱穴の柱根部腐蝕部分に堆積した土壌から少数の土師器の碎片を採取しているが、器形及び器種等を判断できる資料ではなく、図示することも困難なものであった。



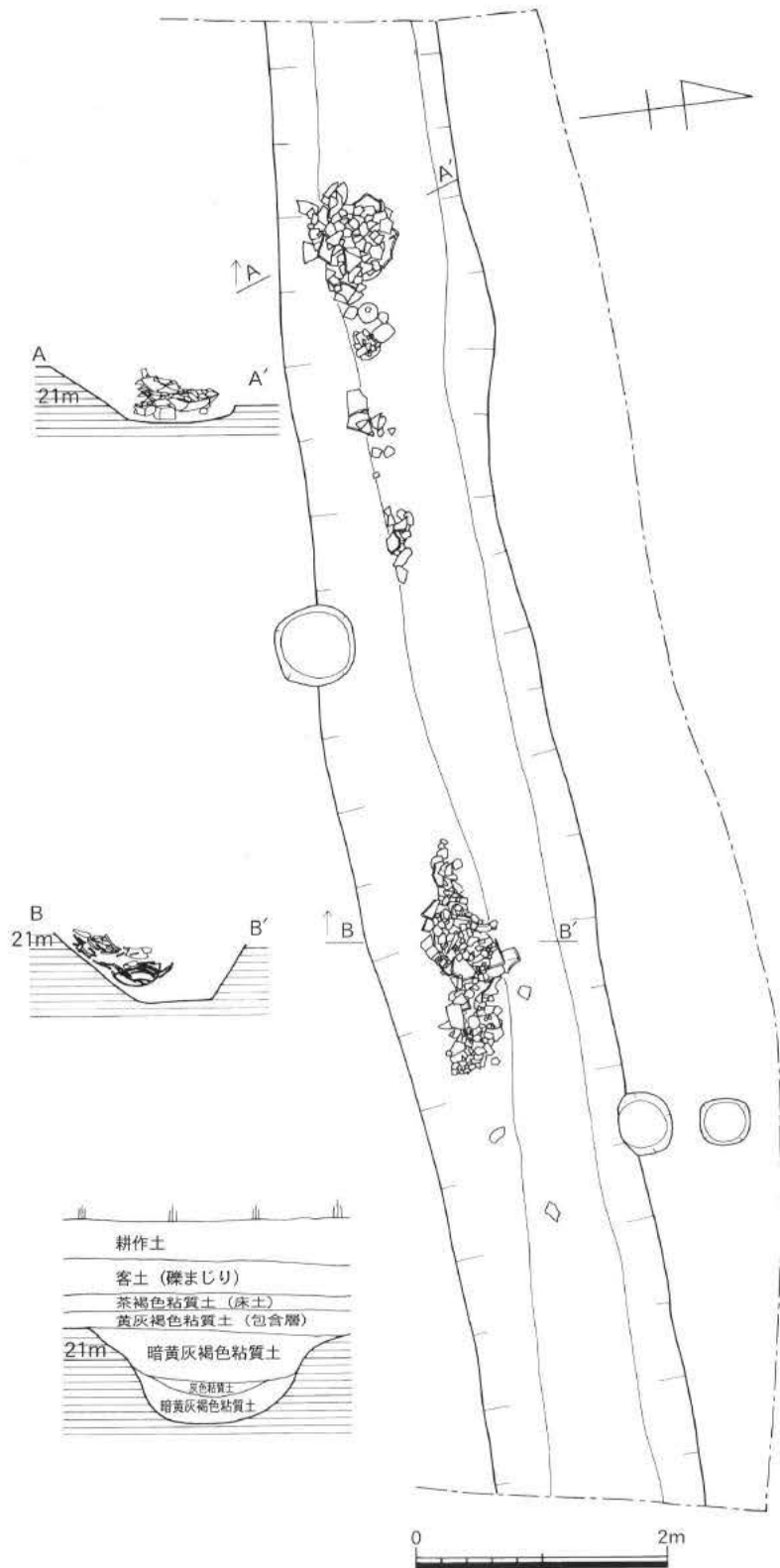
第5図 SB 2 掘立柱建物跡遺構実測図(1/60)

3. 溝状遺構

(1) SD1 溝状遺構

遺構(第3図・第6図)
 主軸をN-88°-Eにとるものである。標高21.25mの等高線がちょうど遺構の中程を南北へ横断するようにほぼ直交して走る。遺構は、最小幅1.4m、最大幅1.9mの値を示すが、ほぼ1.7m幅を保ちながら、調査区域北辺に沿うように配されており、その南側には、2mほど南にSB1掘立柱建物跡が配されている。遺構の横断面形状は、深さ40~76cmの値を示す逆台形状を呈しており、底は、西から東へと緩やかに降っているところから、水は東流するものと推測できる。

出土遺物(第6図~第9図) 東西に長く走る当遺構の中央から西側



第6図 SD1 溝状遺構遺物出土状況図(1/60)

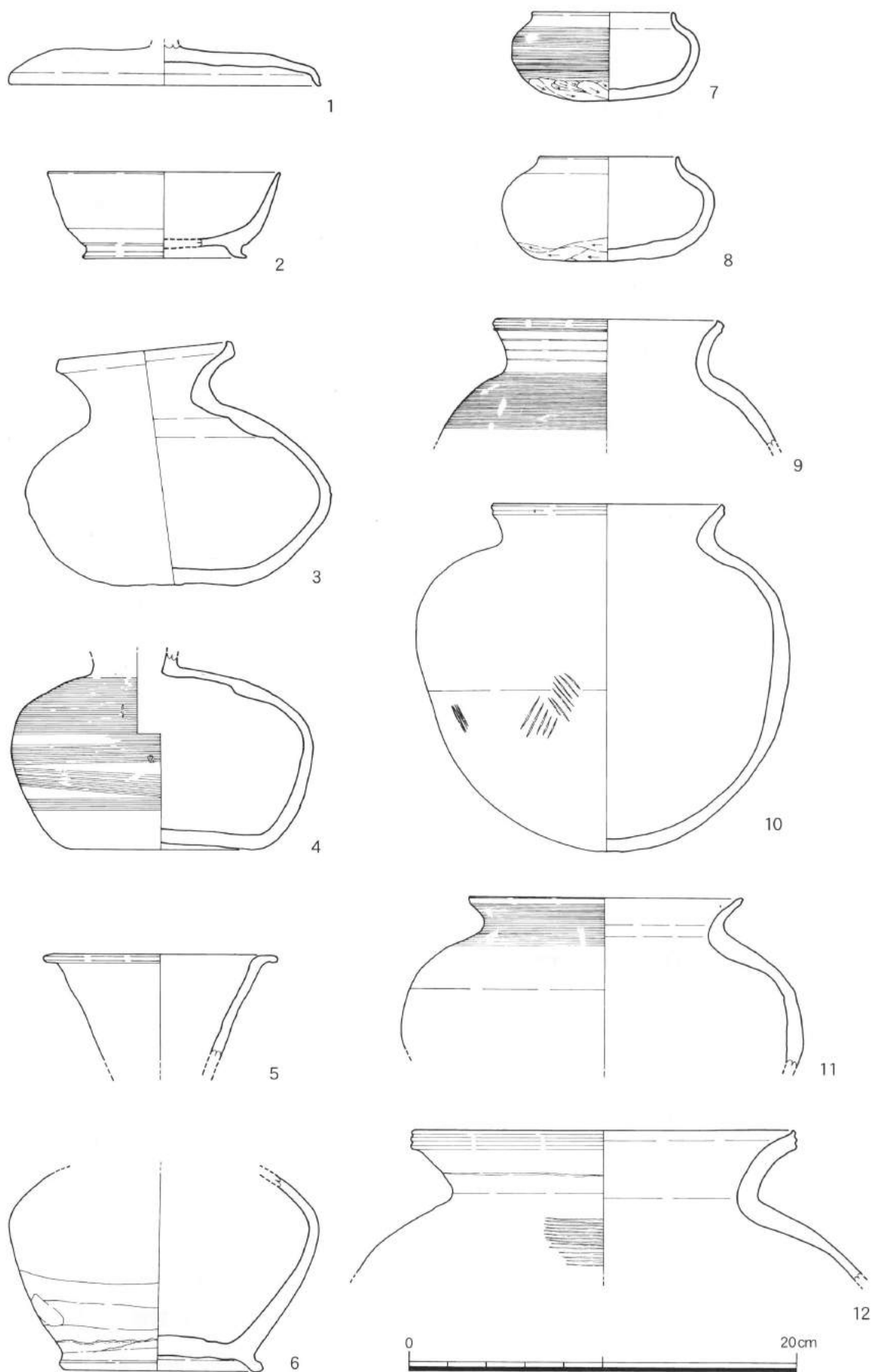
の範囲で、底及び南側側壁にかけて土器のまとまりを検出している(第6図)。土器は、遺構底面で南よりに細長く延びる一群とその上部で南側壁に寄り掛かるように堆積する一群がみられる。前述土器群は、遺構底直上に堆積する暗黄灰褐色の粘質土上面に沈む形で検出され、その土器群を包むように灰色の粘質土が堆積していた。この一群には、須恵器大甕を含め、平瓶、坏などがみられ、周囲に10~20cmほどの石が点在していることから、廃棄後に破砕された状況も推測できる。後述土器群は、遺構南側壁面から前述土器群を包む灰色粘質土上面に滑りこむように堆積しており、前述土器群との間に時間差があるものと考えられる。この土器群の上面には、遺構底に堆積する土壌とよく似た暗黄灰褐色の粘質土が堆積し、遺構全体を被う。以上、遺物の出土状況についてのべたが、以下、各遺物について、述べる。

1(第7図)は、坏蓋である。天井部は、丸味をもたず平らに近くっており、その中央に低い膨らみの消えた疑宝珠様つまみを付すものと想定される。口縁端部は内側に屈曲させている。天井部外面には肩部付近まで回転箆削り調整がみられる。口径15.8cm、器高残存高2.0cmをはかる。

2(第7図)は、坏身である。体部は、外上方へゆるやかに開きながら伸び、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に納めている。高台は底部端に取り付けられ、直立気味な「八」の字形に開き、接地面は、ほぼ平らである。調整は、接地面から1cmのところまで高台貼り付けのため回転ナデ調整を施し、底部には箆削り調整を施している。体部内面には、時計回りに不定方向ナデ調整を施した後、轆轤回転を利用した横方向のナデ調整が施されている。口径11.8cm、器高4.6cm、高台径8.2cmをはかる。

3(第7図)は、平瓶である。やや小形化したもので、体部は扁球形を呈しており、体部最大径はこの中位にある。口頸部は中心よりやや外れたところに取り付けられ、直線的に外上方へ伸びる。口縁端部はわずかにへこませ口唇部を軽くつまみあげる。底部は平底で、箆による切り離しの後、縁辺を横ナデ調整しているが、底については軽く撫でただけで箆痕を残している。口径8.8cm、器高残存高10.2cm、体部最大径15.6cm、底径9.4cmをはかる。

4(第7図)は、平瓶である。やや小形化したもので、体部は丸味が残るものの肩部に張りのあるもので、体部最大径は体部の2/3の位置にある。口頸部は中心よりやや外れたところに取り付けられ、直線的に外上方へ伸びるものと想定される。底部は平底で中心付近をへこませてやや上げ底となす。箆による切り離しの後、縁辺を横ナデ調整しているが、底については軽く撫でただけで箆痕を残している。口径8.8cm、器高12.8cm、胴部最大径15.7cm、底径6.2cmをはかる。



第7図 SD1 溝状遺構出土遺物実測図 I (1/3)

5(第7図)は、台付長頸壺の口頸部と想定される。細い基部からゆるやかに開きながら外上方へ伸びる口頸部は、口縁端部に至り大きく屈曲させ、水平に引き伸ばされて納められる。口径12.0cmをはかる。

6(第7図)は、台付長頸壺の体部と想定される。底部には、5mmほどの高台を「ハ」の字状に貼り付け、その高台の内端部が接地するようになっている。体部は、底部から1/3ほどの位置まで篔削り調整を施し、それより上位はナデ調整である。体部最大径は体部上端から1/3ほど下がった位置にあり、ややなで肩の形態を呈している。器高残存高10.2cm、体部最大径16.0cm、高台径9.2cmをはかる。

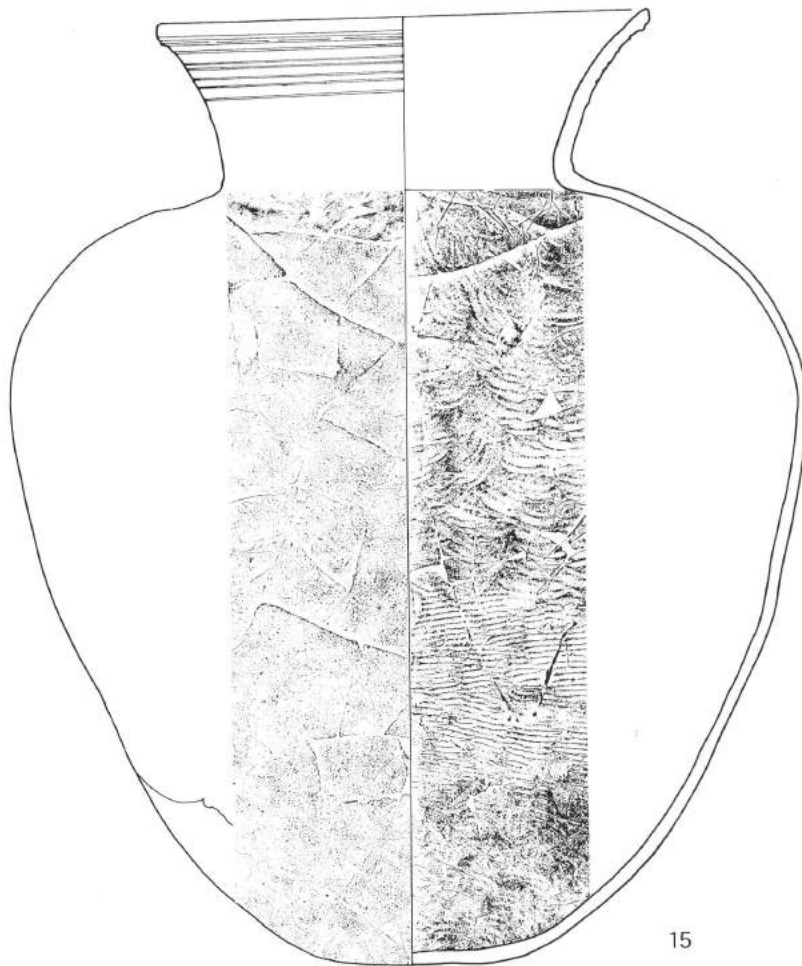
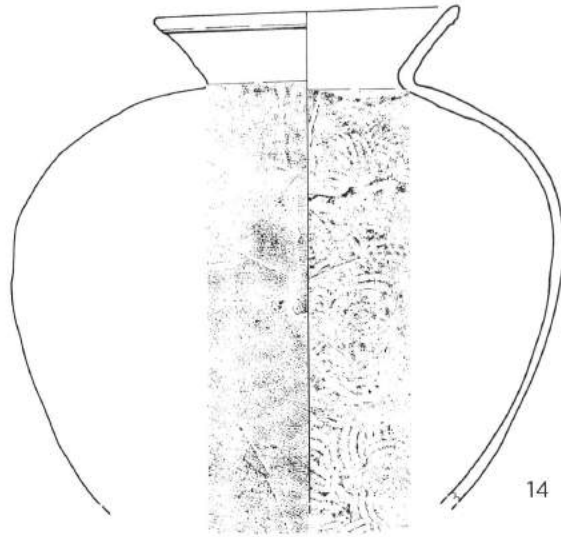
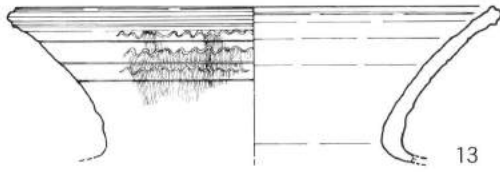
7(第7図)は、短頸壺である。体部は扁球形を呈しており、体部最大径はこの中位にある。口頸部は体部からゆるやかに短く反るように引き出され直立する。底部は丸底で、静止篔削り調整が外から底部中心に向け施され、順次、時計回り方向に進められている。体部には掻き目調整が施されている。口径7.2cm、器高4.6cm、体部最大径9.7cmをはかる。

8(第7図)は、短頸壺である。体部は扁球形を呈しており、体部最大径はこの中位にある。口頸部は体部からゆるやかに短く反るように引き出され直立する。底部は丸底で、静止篔削り調整が底部縁辺に施され、順次、反時計回り方向に進められている。体部にはナデ調整が施されている。口径7.0cm、器高5.5cm、体部最大径11.0cmをはかる。

9(第7図)は、広口壺である。口頸部は、肩部から緩やかに立ち上がり、短く外上方へ直線的に開く。口縁部はコの字状に納める。口端部を軽くつまみあげてわずかにへこませ、口唇部下に1条の凹線を巡らす。この凹線により、みため三角形の突帯を形成している。体部は、球形を呈するものと想定されるが、その下部は失われており、詳細については不明である。肩部外面にカキ目調整。内面ナデ調整である。口径11.4cmをはかる。

10(第7図)は、広口壺である。口頸部は、肩部からくの字に屈曲して立ち上がり、短く外上方へ直線的に開く。口縁部は三角形に納める。口端部を軽くつまみあげてわずかにへこませ、口唇部下に1条の凹線を巡らす。体部は、球形を呈しており、最大径を器高のほぼ中位にもつ。体部下半外面には、成形時の平行叩き目痕を一部見出すことができるが、体部全面にナデ調整を施し、叩き目を擦り消している。口径11.8cm、器高18.1cmをはかる。

11(第7図)は、広口壺である。口頸部は、肩部からくの字に屈曲して立ち上がり、短く外上方へ直線的に開く。口縁部は細長く尖り気味に納める。口端部を軽くつまみあげて尖らせ、口唇部に平坦面をつくりだしている。体部は、その下部は失われており、詳細については不明であるが、器高の中位に体部最大径をもち、その最大となる部分を直線的に整えて肩部・体部・底部の境に変化をもたせ、断面形が六角形に近い形状の扁球形になるも



第8図 SD1 溝状遺構出土遺物実測図Ⅱ(1/6)

のと想定される。口径14.0cmをはかる。

12(第7図)は、小甕の口頸部破片である。口頸部は、体部からくの字に屈曲して立ち上がり、短く外上方へ直線的に開く。口縁部は断面方形に納める。口端部を軽くつまみあげてわずかにへこませ、口唇部下に2条の凹線を巡らす。この凹線により、口唇部の中ほどに見かけ三角形の突帯を形成している。体部外面には平行叩きの後、カキ目調整を施し、内面には同心円文叩きを施している。推定口径19.4cmを測る。

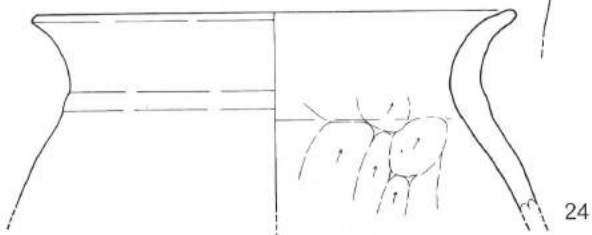
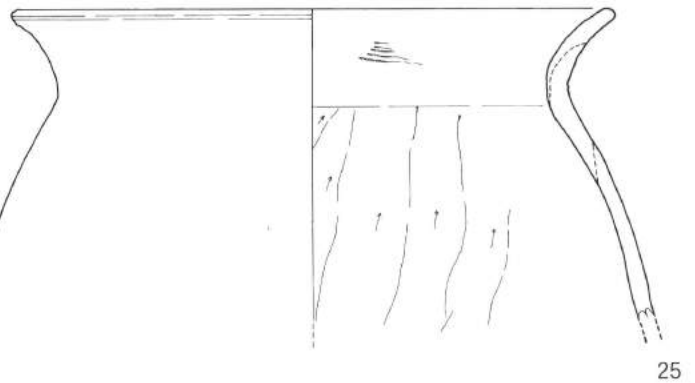
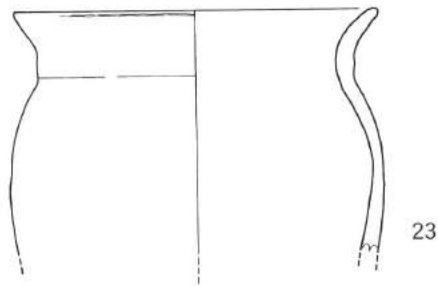
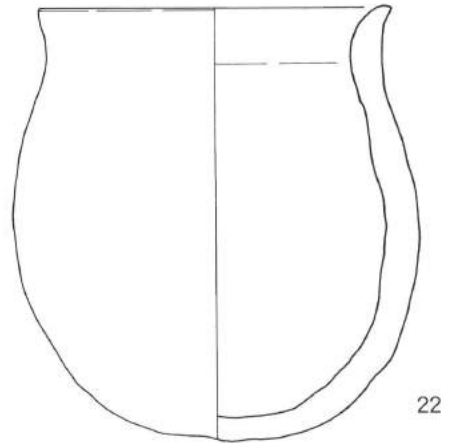
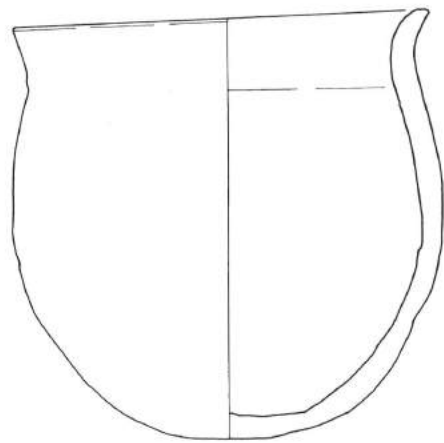
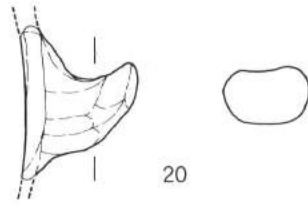
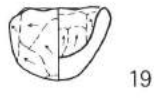
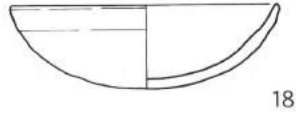
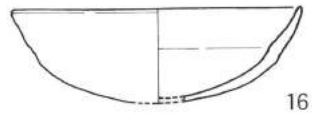
13(第8図)は、大甕の口頸部破片である。口頸部は、体部から屈曲して立ち上がり、外上方へ直線的に開く。口縁部は端部に粘土紐を貼りつけて肥厚させ、軽く撫でつけてわずかにへこませ断面方形に納める。口唇部には、1条の凹線を巡らし、この凹線により、口唇部下に見かけ三角形の突帯を形成している。口頸部外面には、3条の沈線を巡らし、沈線に画された画面には、篋描きの波状文を施す。体部内面には同心円文叩きがみられる。推定口径38cmを測る。

14(第8図)は、甕である。口頸部は、体部から屈曲して立ち上がり、外上方へ直線的に開き、口縁端部は丸く納める。口唇部には、1条の凹線を巡らし、この凹線により、口唇部下に見かけ三角形の突帯を形成している。体部外面は平行叩きの後、カキ目調整を施す。内面は、同心円文叩きである。体部最大径は、体部の上から1/3ほどに認められるが、長胴にはならずほぼ球形を呈するものと想定できる。口径23cm、推定器高43cmを測る。

15(第8図)は、大甕である。口頸部は、体部から屈曲して立ち上がり、緩やかに外反しながら外方に開く。口縁端部は外側に粘土紐を貼りつけて肥厚させ、口唇部下に凹線1条を巡らして端部に丸みをもたせるとともに見かけ三角形の突帯を形成している。口頸部外面には、6条の沈線を巡らし、画面を画するが、文様はみとめられない。体部外面は平行叩きの後、右下がりの刷毛目調整を施す。内面は、同心円文叩きである。体部最大径は、体部の上から1/4ほどに認められる。やや長胴の値を示す。口径38cm、器高76cmを測る。

16(第9図)は、鉢である。体部は浅く、丸みをもった器壁の薄い底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部との境にわずかな屈曲をもって外方へ開く。口縁部は細く引き上げられ、端部は丸く納めている。調整は、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。口縁部内面に見る調整痕から反時計回り方向への仕上げ手順を想定できる。色調は、内外面ともに橙色を基調とするものである。口径11.2cm、残存高3.8cmをはかる。

17(第9図)は、鉢である。体部は浅く、丸みをもった器壁の薄い底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部との境にわずかな屈曲をもって外方へ開く。口縁部は細く引き上げられ、端部は丸く納めている。調整は、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されて



第9図 SD1 溝状遺構出土遺物実測図Ⅲ(1/3)

いる。口縁部内面に見る調整痕から反時計回り方向への仕上げ手順を想定できる。色調は、内外面ともに橙色を基調とするもので、一部底部外面に灰黄色を呈する部位をみとめる。口径11.0cm、残存高3.2cmをはかる。

18(第9図)は、鉢である。体部は浅く、丸みをもった底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁部は細く引き上げられ、端部は丸く納めている。調整は、風化が著しいため詳細は不明であるが、一部、内面に横方向の研磨痕をみとめることができる。色調は、外面が赤褐色、内面が橙色を呈している。口径10.6cm、器高3.3cmをはかる。

19(第9図)は、手捏土器である。丸みをもった底部から円錐状に立ち上がる。指頭により反時計回りにつまみ上げて成形している。色調は、内外面ともに橙色を呈するが、一部、底部から体部にかけて黒斑による変色が見られる。口径3.8cm、器高2.9cmをはかる。

20(第9図)は、甌・把手付土器などの把手部である。4.5cmほどの棒状土塊を土器にとりつけ、1.5cmほどの粘土紐により補強している。土器と把手接着部はナデ調整によって整えられ、把手部は篋削り調整で整えられる。色調は褐色を基調とするが、把手部先端には、二次的な焼成により明赤褐色に変色した部位がみとめられ、把手部直上の体部には煤による黒変部をみとめる。胎土は1mm前後の白色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。

21(第9図)は、甌・把手付土器などの把手部である。4.3cmほどの棒状土塊を土器にとりつけ、1cmほどの粘土紐により補強している。土器と把手接着部はナデ調整によって整えられ、把手部は篋削り調整で整えられる。色調は明赤褐色を基調とするが、把手部先端には、二次的な焼成によりにぶい赤褐色に変色した部位がみとめられる。胎土は1mm前後の白色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。

22(第9図)は、甕である。体部は、丸みをもった底部から内湾して立ち上がり、胴はあまり張らず、緩やかに外反する口縁部となる。体部最大径をほぼ中位にもつが、前後・左右で17cm・15.8cmとその径が異なる扁球形を呈する。色調は赤橙色を基調とするが、体部中位から下位にかけて黒斑がみられる。胎土は1mmの白色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。口径16.3cm・口径13.7cm、器高17.0cmをはかる。

23(第9図)は、甕である。体部は、胴があまり張らず、内湾して立ち上がり、緩やかに外反する口縁部となる。器面調整については、風化が著しく、詳細については不明である。色調は赤橙色を基調とするが、口縁部から体部にかけて一部、黒斑のために変色した部位がみとめられる。胎土は1mm前後の白色粒及び赤褐色粒を多く含むものである。焼成は良好と思われる。口径14.2cm、残存高9.7cmをはかる。

24(第9図)は、甕である。体部は、内湾して立ち上がり、短く外反する口縁部となる。体部内面には、わずかに右曲りの縦方向篋削りが時計回りに施された後、口頸部に横ナデ調整を施している。色調は、橙色を基調とするが、一部、内面に灰橙色を呈する部位がみられる。口径18.8cm、残存高7.7cmをはかる。

25(第9図)は、甕である。体部は、内湾して立ち上がり、緩やかに外反する口縁部となる。体部内面には、わずかに右曲りの縦方向篋削りが時計回りに施された後、口頸部に横ナデ調整を施している。色調は、灰橙色を基調としている。口径23.0cm、残存高12.4cmをはかる。

(2) S D 2 溝状遺構

遺構(第3図) 主軸をN-87°-Eにとるものである。標高21.25mの等高線がちょうど遺構の北辺中央から南辺西側へ斜行するように走る。遺構は、最小幅1.2m、最大幅1.8mの値を示すが、ほぼ1.5m幅を保ちながら、調査区中央に東西に長く配されており、S B 2 掘立柱建物跡の東西長軸柱穴を各々1穴消滅させている。遺構西端では、南側壁にS D 4 溝状遺構が取り付けられているようにみえる。遺構の横断面形は、深さ30~40cmの値を示す逆台形状を呈しており、底は、西から東へと緩やかに降っているところから、水は東流するものと推測できる。

出土遺物(第10図~第11図)

26(第10図)は、白磁碗の底部破片である。底部の断面観察では、器壁は肉厚である。高台は幅広で、削り出しが浅く、低いものである。胎土は粗く、灰色気味の白色を呈す。胎土中に黒い細粒が入る。釉は、黄色ないし灰色を帯びた白色を呈し、若干厚めに施釉されるが、外面の体部下半と底部には施釉されない。高台高0.8cm、高台径7.3cm、残存高2.2cmをはかる。

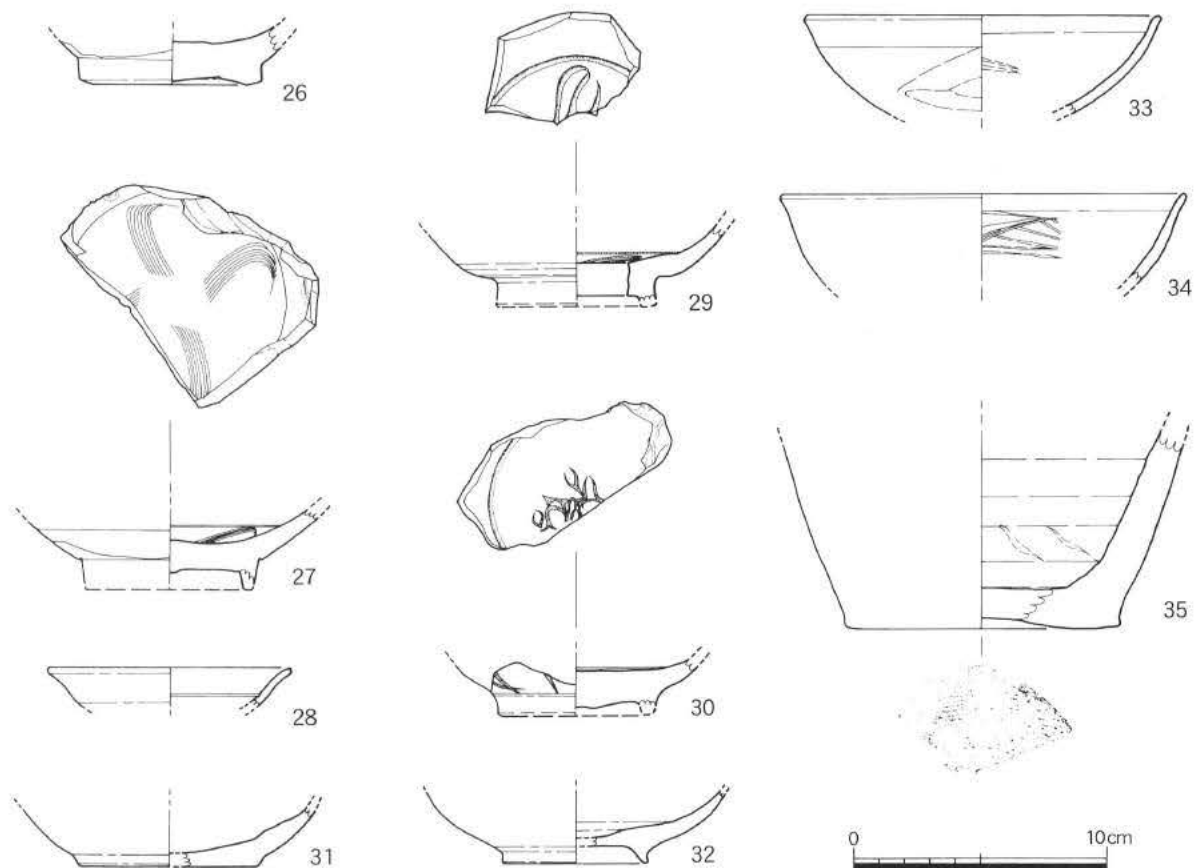
27(第10図)は、白磁碗の底部破片である。底部の断面観察では、器壁は肉厚である。高台は欠損しており、その全貌は明らかではないが、逆台形状に細く高く、直立した高台を有するものと想定される。胎土は灰白色を呈す。体部内面見込みには、櫛状工具による花文が描かれている。釉薬は薄く体部と高台部の境付近まで施される。高台高1.2cm、高台径6.6cm、残存高3.0cmをはかる。

28(第10図)は、白磁皿の口縁部破片である。体部中位で屈曲し、口縁部はわずかに外反しながら薄く引きだしている。底部を欠損しており、見込みに文様を配すかなど、その全

貌を明らかにできないが、内面体部屈曲部に一条の沈線をめぐらせ、口縁部と体部を画している。色調は、灰白色を呈するものである。口径9.4cm、残存高1.6cmをはかるやや小形のものである。

29(第10図)は、龍泉窯系青磁碗の底部破片である。底部の断面観察では、器壁は肉厚である。高台は欠損して、その全貌を明らかにしないが、断面は四角形で、短く直立したものを有すると想定される。内面体部と見込みの境には、片彫りによる沈線をめぐらせ、見込みには華文を配しているものと考えられる。色調は、灰オリーブ色を呈しており、素地は、灰黄色を基調とするものである。釉薬は、高台を含む全体にかかっており、焼成前に畳付き部分を搔き落としている。高台高1.0cm、高台径6.4cm、残存高3.0cmをはかる。

30(第10図)は、龍泉窯系青磁碗の底部破片である。底部の断面観察では、器壁は肉厚である。高台は欠損して、その全貌を明らかにしないが、断面は四角形で、やや深く削り出されたものと想定される。外面体部に鎬のない蓮弁の文様を有するもので、見込みと体部の境に浅い沈線を巡らせ、見込みに草花文を配している。色調は、暗オリーブ灰色を



第10図 SD2 溝状遺構出土遺物実測図 I (1/3)

呈しており、素地は、灰白色を基調とするものである。釉葉は、高台を含む全体にかかっており、焼成前に畳付き部分を掻き落としている。高台高0.8cm、高台径6.2cm、残存高1.8cmをはかる。

31(第10図)は、土師器の坏底部破片である。平らな底部から鋭く屈曲して、外上方へ内腕しつつ伸びる体部となる。口縁部は欠損しており、その全貌は明らかではないが、残存している体部直上5mmほどで口縁端部と思われる。底部には、篋切り離しの痕跡がみられ、切り離し後は、未調整である。篋切り離し痕は、時計回りに動いており、右回転の轆轤によって切り離されたことを想定させる。胎土は、1mmほどの長石砂粒及び赤橙色の砂粒を含む。色調は、外面が赤橙色、内面が黄灰色を基調としている。底径7.0cm、残存高2.7cmをはかる。

32(第10図)は、土師器碗の底部破片である。底部の断面観察では、体部から続く器壁は底部でやや薄くなり、中央部が窪むようであるが、破片であるため、その全貌は明らかではない。高台は「八」字状にしっかりと張り出短いもので、断面形は、歪んだ三角形を呈している。胎土は、1mmほどの長石砂粒を含むものである。色調は、外面が橙色、内面はにぶい黄橙色を呈している。高台高0.5cm、高台径5.9cm、残存高2.9cmをはかる。

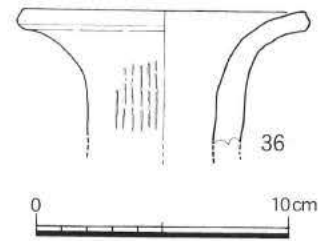
33(第10図)は、瓦器碗の破片である。やや丸みを帯びた体部から内湾しながら外上方に伸び、端部を丸く納めた口縁部へと続く。内面は風化が著しく、器面調整についての詳細は不明であるが、部分的に篋磨き痕を確認している。外面については、右上がりの篋削り調整が口縁部付近にまで施されている。底部については、欠損しているため、その全貌を明らかにしえないが、断面三角形を呈する高台が取付くものと考え。色調は、内外面ともに黄灰色を基調としている。口径14.0cm、残存高4.0cmをはかる。

34(第10図)は、瓦器碗の口縁部破片である。やや丸みを帯びた体部から内湾しながら外上方に伸び、やや外反する口縁部へと続く。内面は風化が著しく、器面調整についての詳細は不明であるが、部分的に篋磨き痕を確認している。色調は、外面が灰黄色、内面は灰白色を呈している。口径15.8cm、残存高3.6cmをはかる。

35(第10図)は、須恵器の壺底部破片である。断面観察では、底部、体部ともに器壁が肉厚である。底部には、糸切り離しの痕跡がみられ、切り離し後は、未調整であり、体部との境は鋭利で、平底である。体部は底部から直線的に外上方に伸びるが、そのほとんどを欠損しているため、体部上位の全貌を明らかにすることは困難である。底部から体部にかけての内面調整は、反時計方向に回転による水引痕がみられ、壺成形が右回転の轆轤成形によることを想定させる。色調は内外面ともに青灰色を基調とするが、外面において灰黄

色を呈する部位もみられる。底径11.0cm、残存高7.1cmをはかる。

36(第11図)は、器台の受部破片である。垂直に立ち上がる体部から短く反るように受部をつくりだし、端部は断面方形に整えている。器面調整については、風化が著しく、詳細については不明であるが、体部から受部にかけて反時計回り方向の粗い刷毛目調整がみうけられ、端部には横ナデ調整を施している。胎土は、多孔質で砂粒を多く含むものである。色調は、灰黄色を基調としている。口径11.2cm、残存高5.2cmをはかる。



第11図 SD 2 溝状遺構出土
遺物実測図Ⅱ(1/3)

(3) SD 3 溝状遺構

遺構(第3図) 主軸をN-11°-Eにとるものである。標高21.25mの等高線は、遺構の4mほど東側を南北に走る。遺構は、最小幅0.20m、最大幅0.4mの値を示すが、ほぼ0.4m幅を保ちながら、調査区南西隅に南北に長く配されており、ほぼ東西方向に細長く配されるSD 4 溝状遺構を切り、SD 2 溝状遺構南側壁面につながる。遺構の横断面形は、深さ10cmの値を示す浅い逆台形状を呈しており、底は、南から北へと緩やかに降っているところから、水は北流してSD 2 溝状遺構に流れ込むものと推測できる。

出土遺物 遺構底部及び堆積した土壌から少数の土器の碎片を採取しているが、器形及び器種等を判断できる資料ではなく、図示することも困難なものであった。

(4) SD 4 溝状遺構

遺構(第3図) 主軸をN-85°-Eにとるものである。標高21.25mの等高線は、遺構の2mほど東側を南北に走る。遺構は、最小幅0.20m、最大幅0.4mの値を示すが、ほぼ0.4m幅を保ちながら、調査区南西隅に東西に長く配されている。遺構の横断面形は、深さ8cmの値を示す浅い逆台形状を呈しており、底は、西から東へと緩やかに降っているところから、水は東流するものと推測できる。

出土遺物 遺構底部及び堆積した土壌から少数の土器の碎片を採取しているが、器形及び器種等を判断できる資料ではなく、図示することも困難なものであった。

(5) S D 5 溝状遺構

遺構(第3図) 主軸をN-75°-Wにとるものである。標高21.25mの等高線は、遺構の屈曲部北側壁に垂直に交わり南北に走る。遺構は、最小幅0.2m、最大幅1.1mの値を示すが、ほぼ0.4m幅を保ちながら、南から北へ走行し、S B 1 掘立柱建物跡東側長軸の北から第2番目柱穴に切られる地点で西から東へとほぼ90度変換する走行を示す。遺構幅は、走行変換地点からその幅0.4mを徐々に広げ、調査区東辺中央部に接するところで最大幅値をしめす。遺構の横断面形は、深さ8cmの値を示す浅い逆台形状を呈す。

出土遺物 遺構底部及び堆積した土壌から少数の土器の碎片を採取しているが、器形及び器種等を判断できる資料ではなく、図示することも困難なものであった。

4. その他の遺構

(1) S A 1 柵列状遺構

遺構(第3図) 主軸をN-6°-Wにとるものである。標高21.25mの等高線は、遺構の北側一番目の柱穴から1mほど西側を南北に走る。遺構は、ほぼ南北に走る1直列のプランを呈するもので、南北3間の構築物である。S B 1 掘立柱建物跡東側の長辺から1.5mほど東に配しており、同遺構とほぼ平行して建ち並ぶ。北から2番目の柱穴は、S D 2 溝状遺構に切られており、遺構の新古関係をあらわしている。ここでは、S D 2 溝状遺構より当遺構が古いことを示している。遺構の計測結果は、南北軸長で6.75mを測る。柱穴間長は各々2.25mを測る。

出土遺物 遺構底部及び堆積した土壌から少数の土器の碎片を採取しているが、器形及び器種等を判断できる資料ではなく、図示することも困難なものであった。

5. 遺構及び出土遺物の計測

表2 富地原岩野A遺跡 掘立柱建物跡 計測表

遺構名	平面構成	長 辺	短 辺	主 軸	備 考
S B 1	3間×6間	東辺10.39m 西辺10.43m	北辺 5.45m 南辺 5.46m	N-6°-W	S D 2より古 S D 5より新
S B 2	3間×4間	北辺 7.40m 南辺 7.46m	西辺 4.95m 東辺 4.95m	N-85°-W	S B 1より新 S D 4より新

表3 富地原岩野A遺跡 溝状遺構 計測表

遺構名	平面構成	幅			深さ	断面形	水流方向	主軸
		最小	通常	最大				
SD1	直線	1.4m	1.7m	1.9m	40-76cm	逆台形	東流	N-88°-E
SD2	直線	1.2m	1.5m	1.8m	30-40cm	逆台形	東流	N-87°-E
SD3	直線	0.2m	0.4m	0.4m	10cm	逆台形	北流	N-11°-E
SD4	直線	0.2m	0.4m	0.4m	8cm	逆台形	東流	N-85°-E
SD5	L字	0.2m	0.4m	1.1m	8cm	逆台形	東流	N-75°-W

表4 富地原岩野A遺跡 柵列状遺構 計測表

遺構名	平面構成	主軸長	主軸	備考
SA1	3間	6.75m	N-6°-W	SD2より古、SB1に平行

表5 富地原岩野A遺跡 出土遺物 計測表1

番号	器種	口径	器高	体部径	底径 (高台)	挿図	備考
1	坏蓋	15.8	2.0	——	——	第7図	須恵器
2	坏身	11.8	4.6	——	(8.2)	第7図	須恵器
3	平瓶	8.8	10.2	15.6	9.4	第7図	須恵器
4	平瓶	8.8	12.8	15.7	6.2	第7図	須恵器
5	長頸壺	12.0	——	——	——	第7図	須恵器
6	長頸壺	——	10.2	16.0	(9.2)	第7図	須恵器
7	短頸壺	7.2	4.6	9.7	——	第7図	須恵器
8	短頸壺	7.0	5.5	11.0	——	第7図	須恵器
9	広口壺	11.4	——	——	——	第7図	須恵器
10	広口壺	11.8	18.1	——	——	第7図	須恵器
11	広口壺	14.0	——	——	——	第7図	須恵器

表6 富地原岩野A遺跡 出土遺物 計測表2

番号	器種	口径	器高	体部径	底径 (高台)	挿図	備考
12	小 甕	19.4	—	—	—	第7図	須恵器
13	大 甕	38.0	—	—	—	第8図	須恵器
14	甕	23.0	43.0	—	—	第8図	須恵器
15	大 甕	38.0	76.0	—	—	第8図	須恵器
16	鉢	11.2	3.8	—	—	第9図	土師器
17	鉢	11.0	3.2	—	—	第9図	土師器
18	鉢	10.6	3.3	—	—	第9図	土師器
19	手握土器	3.8	2.9	—	—	第9図	土師器
20	牛角把手	—	—	—	—	第9図	土師器 甕、把手付土器?
21	牛角把手	—	—	—	—	第9図	土師器 甕、把手付土器?
22	甕	16.3 13.7	17.0	17.0 15.8	—	第9図	土師器
23	甕	14.2	9.7	—	—	第9図	土師器
24	甕	18.8	7.7	—	—	第9図	土師器
25	甕	23.0	12.4	—	—	第9図	土師器
26	碗	—	2.2	—	(7.3)	第10図	白磁Ⅳ類1 a
27	碗	—	3.0	—	(6.6)	第10図	白磁Ⅴ類4 b
28	皿	9.4	1.6	—	—	第10図	白磁Ⅷ類2
29	碗	—	3.0	—	(6.4)	第10図	青(龍)Ⅰ類2 b
30	碗	—	1.8	—	(6.2)	第10図	青(龍)Ⅰ類5 c
31	坏	—	2.7	—	7.0	第10図	土師器坏 a 笠切
32	椀	—	2.9	—	(5.9)	第10図	土師器中椀 c
33	椀	14.0	4.0	—	—	第10図	瓦器
34	椀	15.8	3.6	—	—	第10図	瓦器
35	壺	—	7.1	—	11.0	第10図	須恵器
36	器 台	11.2	5.2	—	—	第11図	弥生土器
36	器 台	11.2	5.2	—	—	第11図	弥生土器

第Ⅲ章 ま と め

1. 調査の成果

今回の富地原岩野A遺跡における発掘調査は、県営ほ場整備事業で、切り盛り調整のできなかった削平部分のたんぼ1枚という限られた範囲で実施されたものであり、富地原岩野A遺跡の全体像を明らかにすることはできなかったが、新立山・靡山から北に派生する舌状丘陵東緩面裾部に広がる河成段丘中位段丘下位面構成層を地盤とした集落跡の一部を垣間みることができた。

今回の調査範囲では、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構5条、柵列状遺構1件と多数の小竪穴など1期～3期の遺構を検出することができ、当地域における新たな資料を加えることとなった。以下、当遺跡の遺構及び出土遺物の所見にふれながらまとめとしたい。

2. 1期の遺構とその年代について

(1) 遺構について

この期は、2期・3期の整地によって大規模な削平を受けており、その遺構は、わずかに調査地の東側に浅く残存するだけである。SD5は、このような現状の中で残存した貴重な遺構と考える。その形態は、ほぼ40cmの幅を保ちながら、南から北へ走行し、途中で西から東へとほぼ90度変換する走行を示す。このような遺構は、通常、溝状遺構として分類されているものであり、本報告においても[S D]記号を付している。しかし、本遺構及び周辺を観察すると、断面が逆台形を呈する溝が幅40cmの平面「L」字形に位置していること、北部分で幅を1mと拡大すること、溝底の高さが緩やかに東傾するものの、ほぼ安定した面を示すこと、遺構周辺には、柱穴状の小竪穴遺構を検出することなどから住居跡を想定することも可能と考える。

大胆な想定で、当遺構を住居跡と仮定すると、平面「L」字を呈する溝は、住居の周壁溝が削平され残存した部分と考えられる。これを基に平面形を想定すると四角形のもの考えることができる。また、通常、遺構が削平される時、その残存状況は、水平底面をもつ住居跡などであれば丘陵上位が残存し、丘陵下位が削平されるものであるが、当遺構を

観察すると丘陵上位の溝が途中で切れたようになっている。このことは、丘陵上部の周壁溝を完全に巡らさない住居床構造を想定させる。当遺跡と同一丘陵上に分布している富地原岩野B遺跡では、住居床面を2段に仕上げ、住居北西部にベッド状の高まり部分を削りだしている住居跡を検出している。このベッド状の部分には、周壁溝が巡らされておらず、当遺構の溝配置と類似する点をみいだせることから、当遺構においても、床南西部にベッド状の高まりをつくりつけていたことを想定させる。

住居跡の規模は、住居北西隅から東方向に走る周壁溝を観察すると幅40cmの溝が徐々にその幅を増し、調査区域東辺付近で最大となり、やや減じたところで調査区域外となっていることから、溝幅の最大値を示した点を住居跡の中線とみなし、北西隅までの距離を折り返した値8mを1辺の長さとする。

(2) 年代について

宗像管内の遺跡では、四角形の住居跡は、現在までのところ、弥生時代後期前半頃を初見とし、これ以降、細部に変化はあるが、掘立柱の屋敷が出現・定着するまで、その形態を踏襲している。このうち、弥生時代後期のものは、長方形を呈するものが多く、2本柱を支柱とするもので、長辺、短辺が明瞭であり、ベッド状の高まりをもつ床があるものについては、そのほとんどが短辺にとりつき、周壁溝のあり方も当遺構のものとは違うことから当該時期は、当遺構にはあてはまらない。また、ベッド状の高まりをもつ床は、5世紀にはいと消滅^(註4)するとされており、当遺構では当該時期もあてはまらない。これらのことから、当遺構は、上限を弥生時代後期終末頃とし、下限を5世紀初頭頃とする古墳時代前期頃の年代を設定できるものとする。また、参考資料ではあるが、2期・3期の整地層に含まれる遺物及びSD2掘削面と整地層との接地面からSD2に混入したと考えられる遺物(器台：第11図を含む)などからもこの時期を肯定できるものとする。

3. 2期の遺構とその年代について

(1) 遺構について

この期は、西から東へ降る緩斜面を掘削・盛土で整え、安定した基底面を構成するもので、溝状遺構1条、掘立柱建物跡1棟、柵列状遺構及び柱穴状の小竪穴遺構が掘り込まれ

ている。SB1掘立柱建物跡の主軸N-6°-WとSA1柵列状遺構の主軸N-6°-Wは、まったく同方向を示すものであり、両遺構が並列して存在していたことを示しているものと考えられる。この両遺構の間隔は、1.2mを測るもので、天平尺の4尺にあたる。また、SB1掘立柱建物跡とSD1溝状遺構の関係については、SB1掘立柱建物跡が、主軸をN-6°-Wにとり、SD1溝状遺構が、N-88°-Eとほぼ90°の走行の違いを示すものであり、これは、SD1溝状遺構が、SB1掘立柱建物跡の北辺に並列して存在していたことを示しているものと考えられる。この両遺構の間隔は、1.8mを測るもので、天平尺の6尺にあたる。これらは、当調査区域内において、SB1掘立柱建物跡が、当該期の中心的な構造物(主屋)として存在していることを想定させ、この屋敷地内では、主屋の東側に柵列を設け、その北辺に外界と画する溝を掘削していたことが理解できる。また、この屋敷は、桁行六間、梁行三間の長方形で、北に外界と画する溝を巡らすことから、その出入り口を残り三方と想定するのであるが、西側は丘陵斜面が迫っており、出入り口を想定し難い。その点、東面は、地形的に谷水田に向けて開かれており、ここに出入り口を想定することが妥当とも取れる。柵列を設け、外界から出入り口を直視できないようにしたと考えれば、柵列の存在意義が高まるものと考えられる。

(2) 年代について

ここでは、年代についてその詳細を把握する好資料を得ることのできなかつたSB1掘立柱建物跡及びSA1柵列状遺構は除外して、多くの一括資料を得たSD1溝状遺構の出土遺物を検討することで、当該期の年代にせまりたい。

SD1溝状遺構の出土遺物は、前章で詳細を記したように、東西に長く走る溝の中央から西側の範囲で、溝底から南側側壁にかけてまとまって検出されている(第6図)。このなかで、特に坏蓋(1)及び坏身(2)は、その形態の特徴から当該期の年代推定に重要な資料である。その形態は、坏蓋の方では、天井部が丸味をもたない平らに近く、その中央に低い膨らみの消えた疑宝珠がつくものと考えられ、口縁部は内側に屈曲する器形で、回転篋削り調整が肩部付近まで施されるなど、陶邑窯跡群IV期2類^(註5)に類似している。また、福岡県の例では、大野城市の牛頸ハセムシ窯跡群12地区出土須恵器^(註6)に類似しているものと考えられる。この12地区からは、灰原出土須恵器に篋書されたものが検出されており、そのなかに「和銅6(713)年」銘の刻まれた甕もあり、周辺出土須恵器との対比・検討結果から中村浩氏は、当該時期を考えている。一方坏身では、高台接合部分の底部及び体部に丸みをもつ

もので、高台は底部端に「ハ」の字形に開く器形で、太宰府市の宮ノ本遺跡9号窯跡出土の坏cにおいて、形態属性一8に分類されたもの^(註7)に類似している。同報告書の中では、この属性のものに近似する大宰府史跡SD2340出土紀年銘木簡「天平6(734)年」共伴土器群を例としてあげ、この属性が8世紀前半を遡る可能性を示している。

その他の土器では、平瓶と壺に注目する。平瓶は、やや小形化したもので、体部は扁球形を呈したもののや丸味が残るものの肩部にやや張りのあるものなどがみられるが、いずれも本器種の最終段階に近いものと考えられる。「陶邑窯跡群」報告書の記述を借りれば、Ⅲ期3類を想定できよう。また、壺は、長頸壺、短頸壺、広口壺と各器種が出土している。なかでも、長頸壺6は、底に高台のつくもので、なで肩の形態を呈しており、口頸部だけの破片(5)とあわせて考えると、「陶邑窯跡群」報告書の記述を借りれば、Ⅲ期3類を想定できよう。

これらのことから、SD1出土遺物は、上限を7世紀末頃とし、下限を8世紀前半頃とする律令成立期から奈良時代前半期の年代を設定できるものとする。また、参考資料ではあるが、SB1掘立柱建物とSA2柵列状遺構の柱穴間隔が天平尺でとれることからこの時期を肯定できるものとする。

4. 3期の遺構とその年代について

(1) 遺構について

この期は、西から東へ降る緩斜面を掘削・盛土で整え、安定した基底面を構成するもので、溝状遺構2条、掘立柱建物跡1棟及び柱穴状の小竪穴遺構が掘り込まれている。2条の溝状遺構SD2とSD3の主軸は、それぞれN-88°-EとN-11°-Eにとり、ほぼ90°の走行の違いを示すものであり、両者がほぼ垂直に接続されていることを想定させる。水の流れも、SD3溝状遺構を南から北に流れたものが、SD2溝状遺構に注ぎ、西から東へと流れる。また、SB2掘立柱建物跡とSD3溝状遺構の関係については、SB2掘立柱建物跡が、主軸をN-85°-Wにとり、SD3溝状遺構が、N-11°-Eとほぼ90°の走行の違いを示すものである。これは、SD3溝状遺構が、SB2掘立柱建物跡の西辺に平行して走っていることを示し、同時にSD2溝状遺構が、SB2掘立柱建物跡の北辺に平行して走っていることをも示すこととなる。これらは、当調査区域内において、SB2掘立柱建物跡を中心的な構造物(主屋)とし、その北辺を東流する溝により外界と画する

屋敷地が存在していることを想定させるものと考え。西辺の溝は、その幅は狭く、深さも8cmと浅いことから外界を画するものではなく、犬走りの溝、若しくは、屋根からの雨だれによる侵食によってできた溝と考える。

(2) 年代について

ここでは、年代についてその詳細を把握する好資料を得ることのできなかつたS B 2 掘立柱建物跡及びS D 3 溝状遺構は除外して、多くの一括資料を得たS D 2 溝状遺構の出土遺物を検討することで、当該期の年代にせまりたい。

S D 2 溝状遺構の出土遺物は、東西に長く走る溝の調査区域西端及び調査区域東側にまわって検出されている。特にS D 2 溝状遺構西端から出土した陶磁器類(第10図)は、その形態の特徴から当該期の年代推定に重要な資料である。

当遺構検出の陶磁器類のうち、白磁は、碗2点、皿1点。青磁は、碗2点を数える。いずれも破片であるが、その特徴を如実に示している。白磁碗のうち、1点(26)は、幅広の高台で、削り出しが浅く、肉厚の底部。胎土中に黒い細粒が入り、黄色ないし灰色を帯びた釉薬がやや厚めに施されるなど、白磁碗IV類I aに属する特徴を示している。^(註8)また、もう1点(27)は、逆台形状に細く高く、直立した高台を有し、肉厚の底部。胎土は灰白色で、釉薬は薄く体部と高台部の境付近まで施される。体部内面見込みには、櫛状工具による花文が描かれているなど、白磁碗V類4 bに属する特徴を示している。白磁皿(28)は、体部中位で屈曲し、わずかに外反しながら薄く引きだされる口縁部。内面体部屈曲部に一条の沈線をめぐらせ、口縁部と体部を画しているなど、白磁皿VIII類2に属する特徴を示している。この類は、内面見込みに文様を配すものもあり、細分できるが、当資料においては、欠損品であり、細分できなかつた。青磁は、碗2点のうち、1点(29)は、断面四角形で、短く直立する高台に肉厚の底部。内面体部と見込みの境には、片彫りによる沈線をめぐらせ、見込みには華文を配するなど、龍泉窯系青磁碗I類2 bに属する特徴を示している。また、もう1点(30)は、断面四角形で、やや深く削り出された高台に肉厚の底部。外面体部に鏝のない蓮弁文を有し、見込みと体部の境に浅い沈線を巡らせ、見込みに草花文を配する。釉薬は、高台を含む全体にかかっており、焼成前に畳付き部分を掻き落とすなど、龍泉窯系青磁碗I類5 cに属する特徴を示している。

これらの陶磁器類は、形態分類ごとにその消長がみられる。大宰府出土土器の長期にわたる研究成果の積み重ねから山本信夫氏らにより、その消長をよみとることが可能となつ^(註9)

てきた。その成果によると、当遺跡におけるSD2出土陶磁器は、白磁碗IV類1a、白磁碗V類4b、白磁皿VIII類2、龍泉窯系青磁碗I類2b、龍泉窯系青磁碗I類5cであり、その消長は、山本編年のXI～XII期に白磁碗IV類1a、白磁碗V類4bがみられ、XIV期で、龍泉窯系青磁碗I類2bが出現するとしており、この時期をC期(XI～XII期)11世紀後半～12世紀前半、D期(XIV～XV期)12世紀中頃～12世紀後半にあてている。また、E期(XVI～XVII期)13世紀前後～13世紀前半^(註10)には、龍泉窯系青磁碗I類5c、白磁皿VIII類2がみられるとしている。ここで、当遺構出土の陶磁器の器種がすべて出揃う時期を検討すると、E期(XVI～XVII期)13世紀前後～13世紀前半に白磁皿VIII類2がみられるところであり、他の器種も少ないながら存在する当該期が、当遺構の埋没時期と考えられる。

当遺構検出の土器類では、右回転の轆轤によって切り離された平らな底部をもつ土師器^(註11)坏a(31)XIV期や土師器碗の底部破片で、中碗c(32)に属するとみられるもの。また、瓦器碗の破片で、その形態的特長から瓦器碗IIIa(33、34)XV期に属するものなどがみられ、陶磁器類の年代と大差を示さず、当遺構の時期を12世紀の後半を遡らず、13世紀の前半代のうちに収まるものと考えたい。

(註)

註1：北崎トータル岩は、福岡市の西区、北崎海岸を模式地とするもので、宗像市に分布するものは、およそ100万年前頃、中生代白亜紀前期末に冷却・固結化したものである。大半は風化し、真砂土と化しているものである。

註2：砂礫層は、河成段丘中位段丘下位面構成層とみられるもので、およそ9～10数万年前頃、新生代第四紀更新世後期の河原を形成したものである。

註3：貝原益軒『筑前國續風土記拾遺』第四卷 藤原村 祇園社 筑前国続風土記拾遺刊行会 1973

註4：原 俊一『宗像市史』通史編第1巻 第4章古墳時代 第3節 住居 宗像市史編纂委員会 1997

註5：中村 浩『陶邑』Ⅲ 財団法人 大阪文化財センター 1980

註6：中村 浩・舟山良一『牛頸ハセムシ窯跡群』Ⅱ 大野城市文化財調査報告書 第30集 1989

註7：中島恒次郎『太宰府・佐野地区遺跡群』Ⅱ 大宰府市の文化財 第17集 1991

註8：横田賢次郎・森田 勉『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』九州歴史資料館研究紀要4集 1974

註9：山本信夫『北宋期貿易陶磁器の編年』貿易陶磁研究 No.8 1988

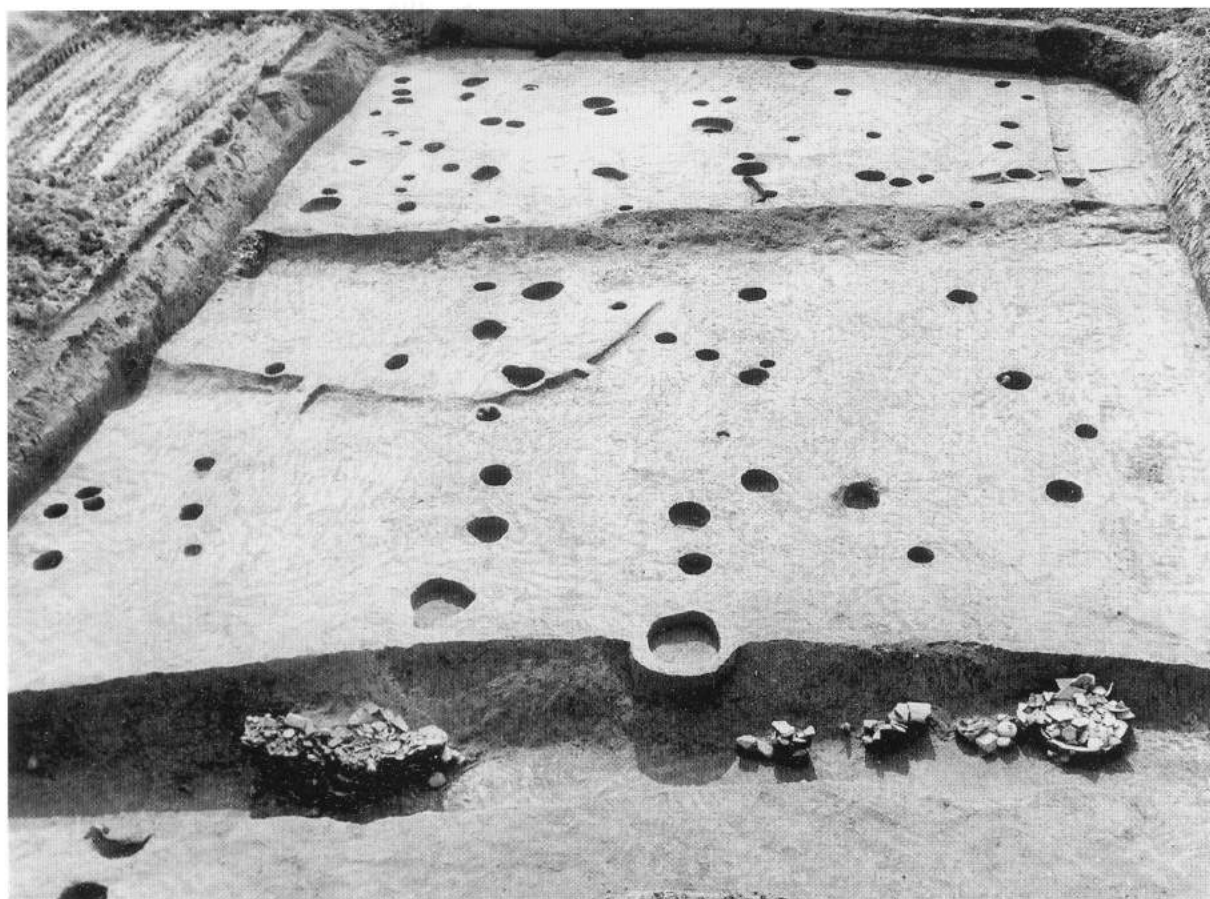
註10：山本信夫『大宰府における13世紀中国陶磁の一群』貿易陶磁研究 No.10 1990

註11：山本信夫『統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究に寄せて—』九州上代文化論集 1990

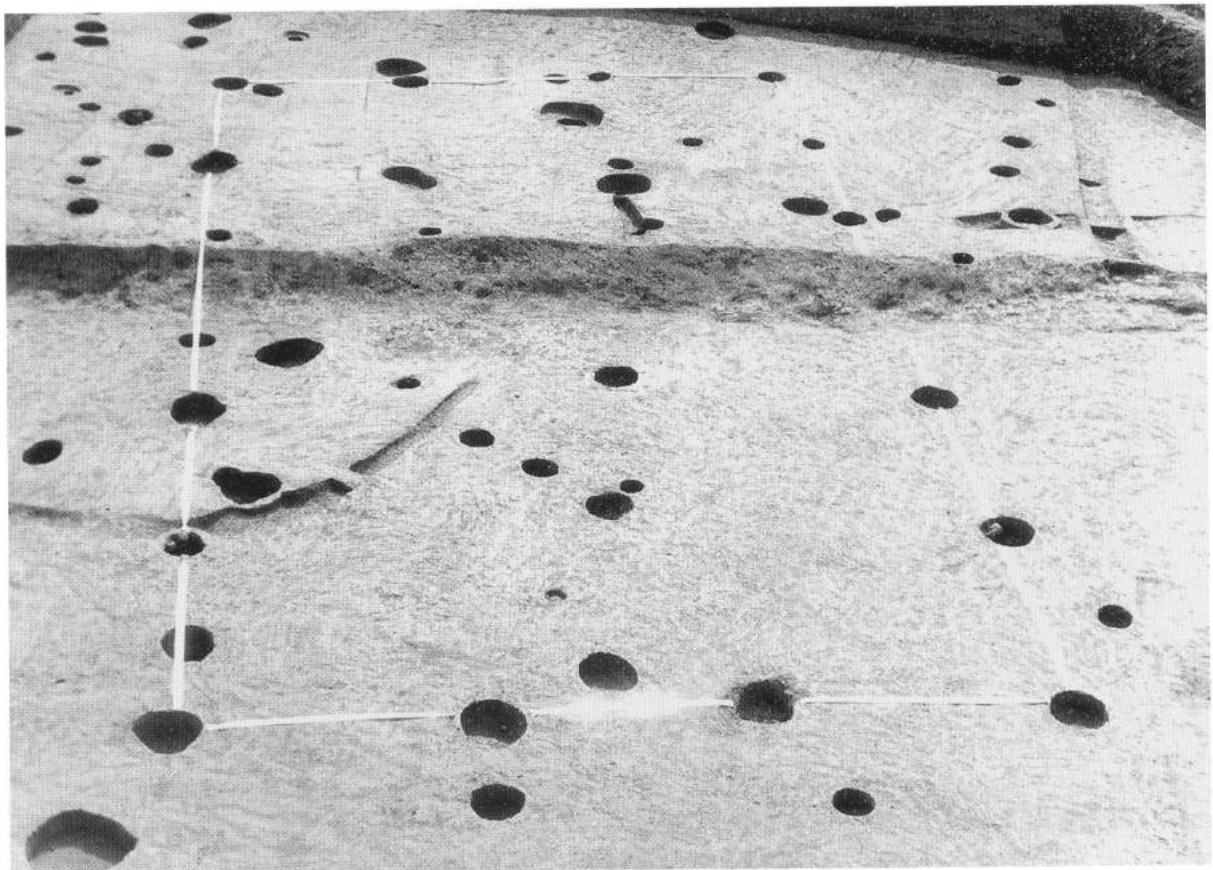
版 図



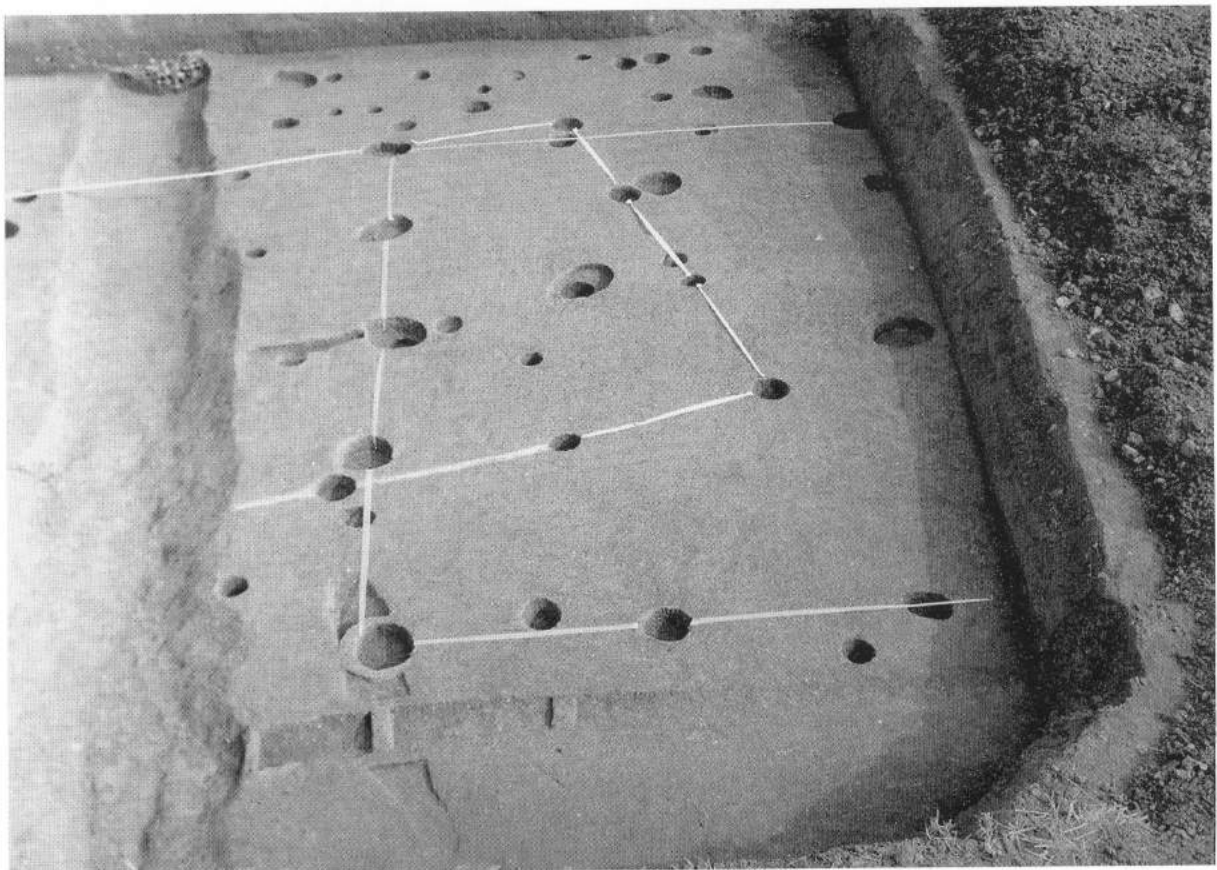
富地原岩野 A 遺跡周辺の航空写真



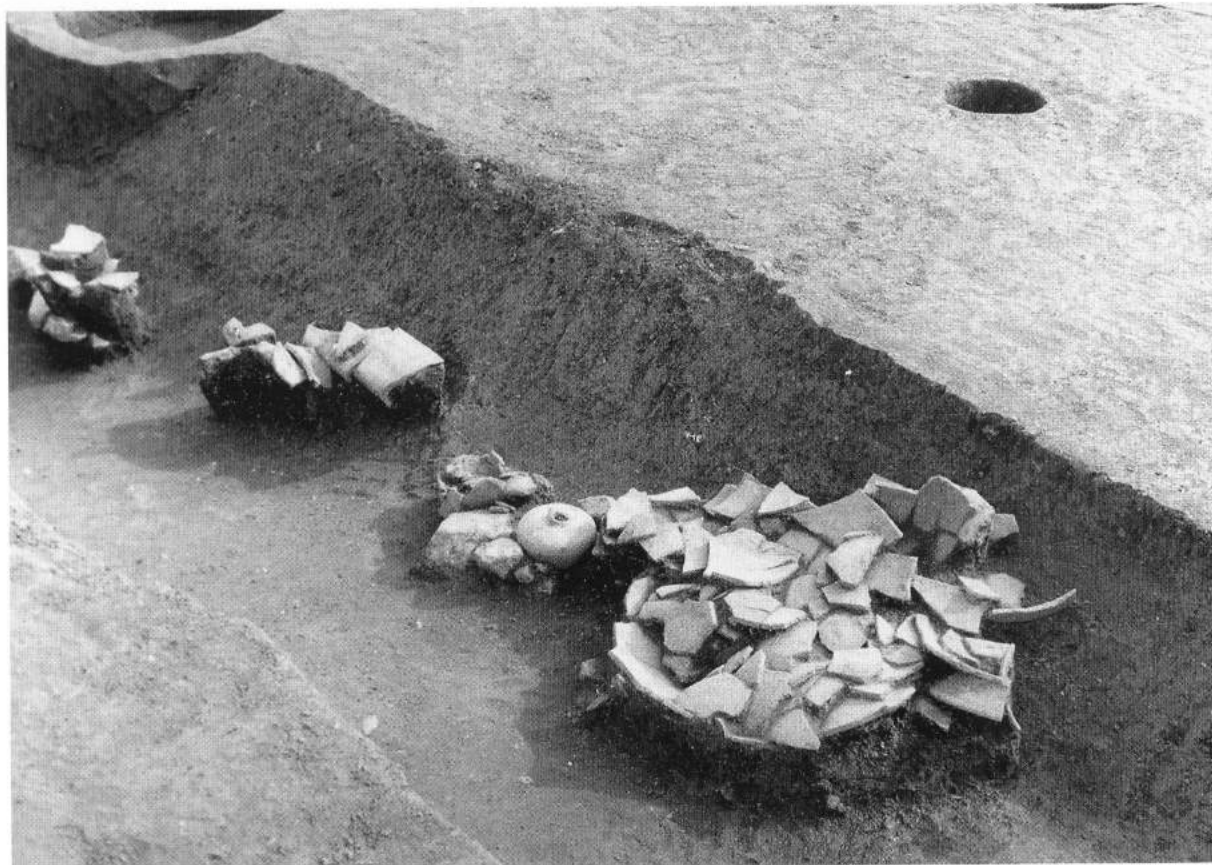
富地原岩野 A 遺跡の全景写真 (北から)



富地原岩野A遺跡 SB 1 掘立柱建物跡 (南から)



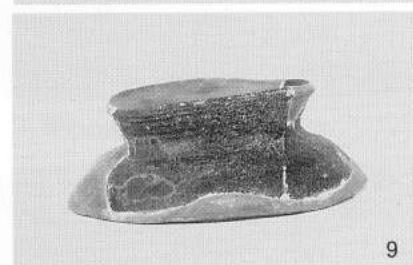
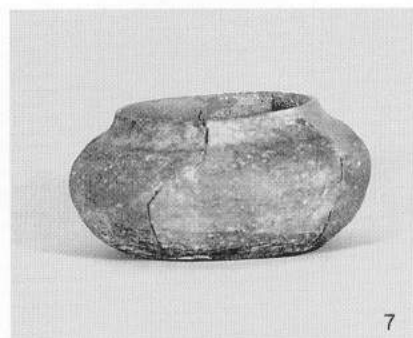
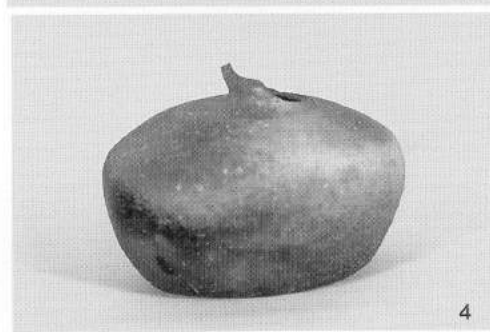
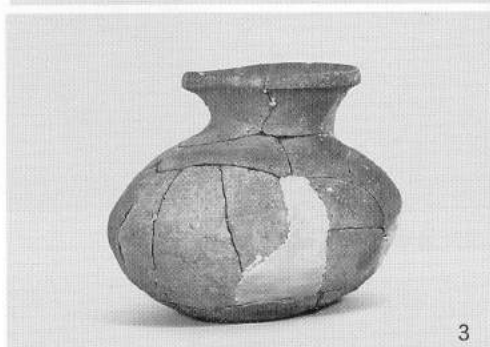
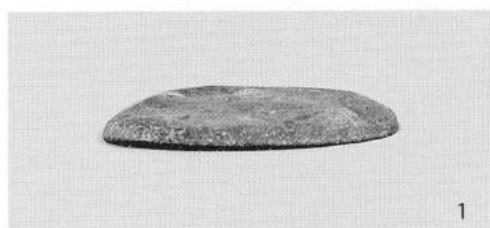
富地原岩野A遺跡 SB 2 掘立柱建物跡 (西から)

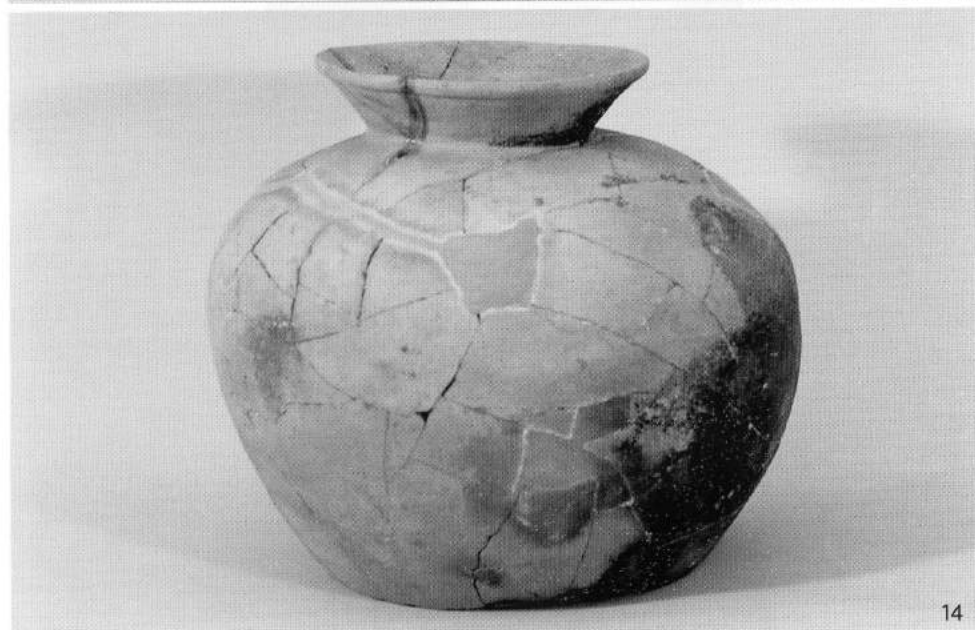
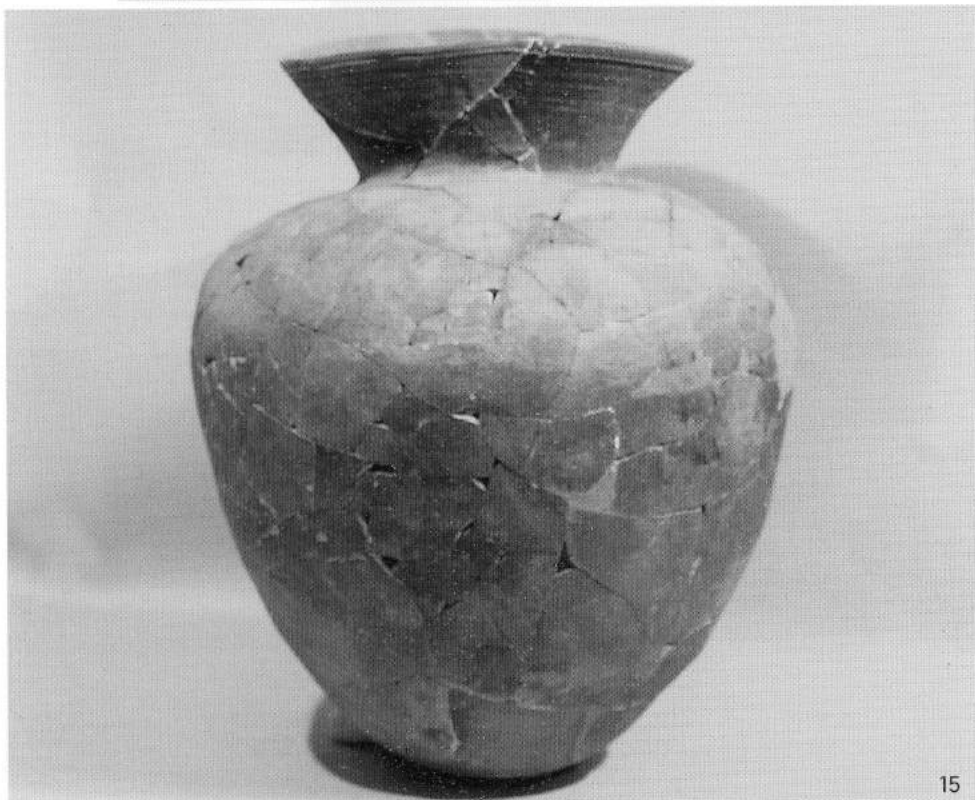
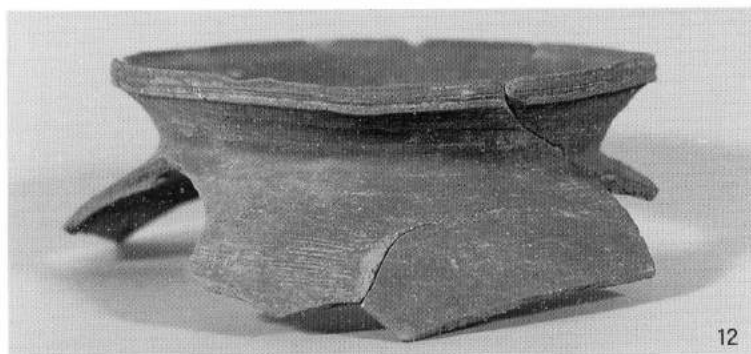


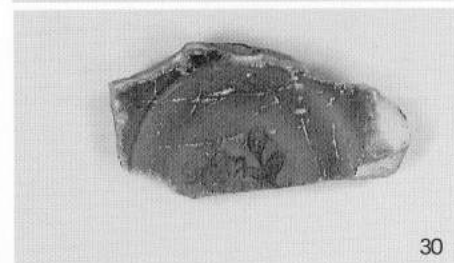
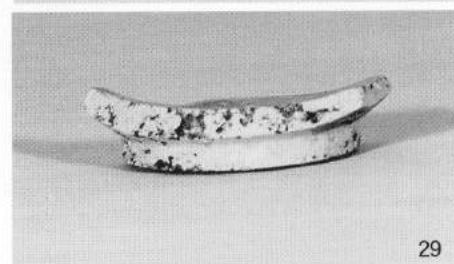
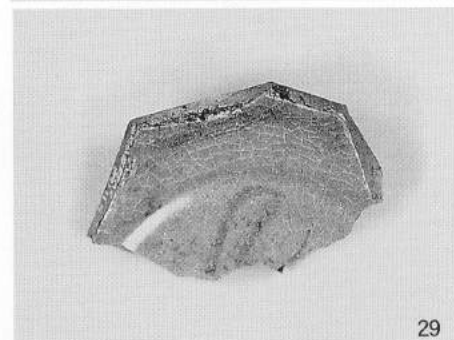
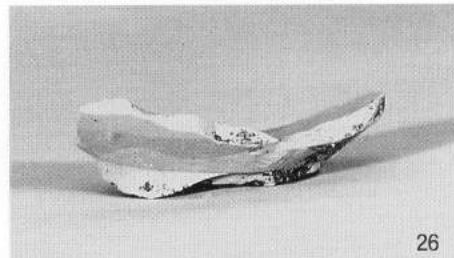
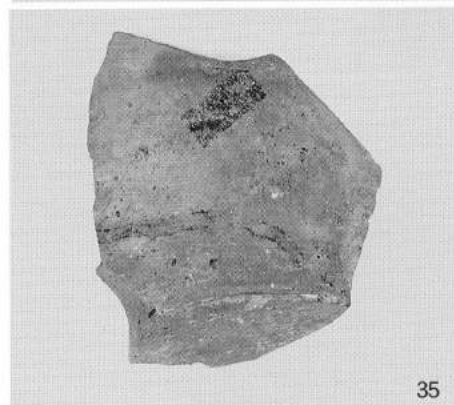
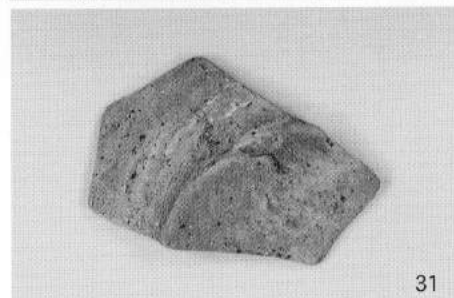
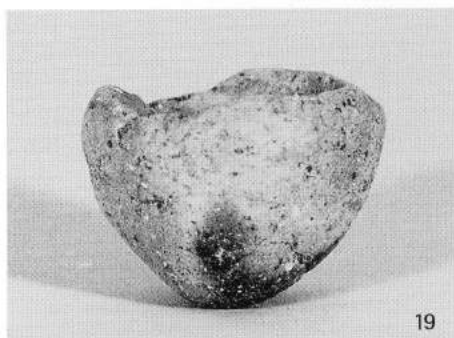
富地原岩野A遺跡 SD 1 溝状遺構遺物出土状況写真（西から）



富地原岩野A遺跡 SD 1 溝状遺構土層断面写真（西から）







報 告 書 抄 録

書 名	富地原岩野A (フジワライワノエー)					
副 書 名	福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告					
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第49集					
編 著 者 名	安部 裕久					
編 集 機 関	宗像市教育委員会					
所 在 地	〒811-3492 福岡県宗像市大字東郷995番地 TEL 0940-36-1540					
発 行 年 月 日	西暦2001年3月30日					
所 収 遺 跡	富地原岩野A遺跡 (フジワライワノエーイセキ)					
所 在 地	福岡県宗像市大字富地原字岩野1479番地ほか					
コ ー ド	市 町 村	4 0 2 2 0	北 緯	33度	47分	38 秒
	遺 跡 番 号	3 3 0 5 3 3	東 経	130度	36分	18 秒
調 査 期 間	1991年11月1日～1991年11月29日					
調 査 面 積	500㎡					
調 査 原 因	平成3年度富地原地区県営ほ場整備事業					
遺跡の主な時代	奈良時代・鎌倉時代					
遺 跡 の 種 別	集落					
主 な 遺 物	土師器・須恵器・磁器					
特 記 事 項						

富 地 原 岩 野 A

宗像市文化財調査報告書

第49集

平成13年3月30日

発 行 宗像市教育委員会

宗像市大字東郷995番地

印 刷 (有) 青 雲 印 刷

北九州市小倉北区清水1丁目8-7